



登場人物紹介。

ナーエ 能力 フランメ・ウンド・ドンナー

ナベリウスの名誉ある騎士のみが所有出来る『神鳴る剣』の継承者。
かつて、ナベリウスを二度に渡って、半壊させたロタンという魔導士によって、
殺害され、今は幽霊としてこの世界に存在している女。

グロッタ 能力 ペイル・ホース

ナーエに恋心を抱く被差別部落『墓守』出身の男性。
幼い頃から、自身の血を操作する能力を開花させる。

エサル 能力 アイス・コフィン

ナーエによって任命された二番目の竜の騎士の少年。
元々は聖職者志望でもあるが、過剰なまでに、移民を憎悪している。

スキタリス 氷雪竜。ドラゴンの塔の中におり、ナベリウスという国家の創設者。
ナーエはドラゴンの力を借りる事になる。

ア・ノモス 呪詛竜。墓守達が信仰するドラゴン。地下世界の奥底にいる。

+++++

編集・誤字脱字協力 矢崎美月様

<https://twitter.com/uran235u>

『ある奴隷の言葉』

支配する奴らは俺達を人間と置いていやしない。

奴らにとって、俺達は牛や豚と同じなんだ。使い潰して、死んでも、ろくに供養もしない。奴らは俺達に蔑称を与え、普通の人間じゃとてもやりたがらない仕事を長時間やらせる。使い潰して死なせてしまえば、いくらでも何処からか補充してくるんだっ！

十

景色の美しさは、きっと、人種や性別などを問わず、感じ取る事が出来るのだろう。

此処は、この国で、一番、綺麗な場所の一つだ。

彼女は物憂げに、景色の色彩に見とれていた。

溪谷だった。

此処からは、この国の象徴である湖畔がよく見える。

一人の騎士が岩の上に佇んでいた。剣を柄から離し、岩肌に突き立てている。

長い黒髪の女だ。

切りもせず、結びもせず、剣を振るうのに邪魔になるのではないかと置いてしまう。昔から髪は長かった。だが、彼女は剣の腕はこの国では一流だった。

「久しぶりだな！ 騎士殿っ！」

彼は、黒髪の女に向かって叫ぶ。

彼女は振り向く。

「お前は……………誰だ…………？」

グロッタは、頬を引き攣らせる。

「俺か？ 俺の名はグロッタだよ。ガキの頃にお前は俺と遊んでいた。ああ、俺の事を知っていた。イバラ枝の冠を投げ合って、一緒に怒られたよな？ 十に満たない年で、本物の剣で斬り合って、互いに怒鳴られたんだ。覚えている。……覚えているんだよ……………」

「……………知らないわね。ごめん、マジで忘れてる……………」

グロッタは、へなへたと、地面に腰を下ろす。

「ふざけやがって……………」

彼は地面を拳で殴り付ける。

「テメエは最上位で、俺は底辺。この下らない人生の翻弄は何だろうな？ ええ？ 騎士様よ？

ナーエ、お前は国王の側近で、俺は半分村八分だ。お前は随分、努力したよな？ でも、努力なんざしなくても、テメエは歩兵長か、魔法剣士か、斥候か、聖職者にもなれた。……………俺は、俺に与えられた職業は、タダ一つだけだった。親の跡を継ぐ事。……………、そう、死体処理、死体を墓へ詰めたり、棺桶の制作。そんな日々だ。……………、俺は苦勞して金貰っているのに、街に向か

えば、俺を毛嫌うパン屋や肉屋も多い。何だ？ この不平等は？ ふざけやがって……………」

女騎士、ナーエは、彼の言葉に余り興味を示さなかった。

彼女の瞳は、別の何かを見ていた。

「この私が憎いのなら、私をその剣で斬り付けてみるか？」

騎士は、墓守に訊ねる。

グロッタは腰に差した、剣を抜き放つ。

そして、ナーエの腕に向けて、全身全霊で斬り付ける。……だが。

グロッタは、バランスを崩して、斜面から転がり落ちて、近くの樹木に身体をぶつける。

「……確かに、斬り付けてやったのに……。お前……………何故だ……っ！」

「腕を狙ったな。腕でも落とそうとしたのか？ 何故、私の首を落とそうとしなかった？ それとも、私が剣を抜くとでも思ったのか？」

甲冑にコブラの紋章が施された女は、グロッタを、無感情な瞳で眺めていた。

「確かに、斬ってやった筈っ！」

「分からないのか？」

ナーエはそれ以上は答えなかった。

グロッタの方から、答えを導き出した。

「お前、お前、……もう、……生きていないんだな……………」

甲冑ごと、向こうの景色が薄らと透けて見える。

グロッタは、悲しそうな顔をしていた。

「うん。私はもう幽霊なんだ」

しばらくの間、二人共、沈黙していた。

風が吹き抜ける。

ナーエの身体を、木の葉が通過していく。

「大切な肉親。妹なら死んだよ。そして、国王は私の声が聴こえた。私は死してもなお、この国の守護者なんだ」

「……………俺はこの国を憎悪している。俺を被差別民にしてきたからな。生まれる前から決まっていた事だったんだよ。『墓守』という民族に生まれた、幼い俺は無知だった……その後、苦汁を舐める事になった」

ナーエは彼の言葉を、あまり受け止めるつもりは無いみたいだった。

「すまないな。お前との記憶は本当に忘れた」

ナーエは腰から剣を引き抜く。

「これは、この国の家宝である『神鳴る剣』だけど。グロッタと言ったか？ お前はこの国をどうしたい？」

その剣は、グロッタには向いていなかった。

何も無い宙を指し示している。

だが、いつ彼に向かってもおかしくないように思えた。

「復讐だよ。ロタンがそうしたようにっ！」

「そうか」

彼女の顔は陰しくなる。

「魔道士ロタンがこの国の領土に眼を付けて、この国は壊された。お前はロタンに加担したのか？」

「……………、いや。話を聞いただけだ。彼はこの俺に何も望まなかった。奴にとっても、俺は価値の無い存在で、俺を仲間に取り入れるつもりも、情報を引き出そうとするつもりも無かったな……………ただ……………」

「なんだ？」

「奴は、この俺を、この俺を人間扱いし、俺の才能を認めてくれた……………」

グロッタは、嘔吐するかのようには述べた。

「もう、何年も前の話になるんだけどな……………、お前のように、ロタンも俺の事を忘れているのかもな。一度、会っただけだし……………」

ナーエは湖の方を見る。

二人の間に、どうしようもない、険悪な感情が澱んでいく。

「私の妹は奴に殺された。私も奴に殺された。この国の大半の者達が、奴に殺され、奴の下僕になった者も多い。そして、幽霊となった者達は、私の妹も含めて、無へと還っていった。私は今、ロタンを殺し、虚無へと還す為だけに存在している」

ナーエは剣を柄に収める。そして……………。

「グロッタ、お前、私になりたいのか？ 生前の私の地位に。なら、宝物庫へ案内してやるよ」
そう言われ、グロッタは彼女に言われるままに付いていく。

十

城の宝物庫の中には、剣や盾、弓矢、槍、籠手や胸当て、グローブなどの武器や防具が一通り揃っていた。

ナーエから、好きなものを持っていけと言われた。

グロッタは、赤色をした甲冑を見つける。

「これは……………？」

「ロタンに殺された騎士のモノだよ。もっとも予備の奴で、彼がいつも身に付けているものは、埋葬品として棺に入れられたらしいが。お前、知っているか？」

「知らん。俺以外の墓守がやったんだろ」

「墓守は今や足りていないからな。商人や工匠が代わりにやっている。儲かるらしい」

グロッタは深紅の甲冑を全身に纏う。そして、幾つかのこの国の平均的な服飾を拝借する。

墓守の革の服は、その辺りに投げ捨てた。

そして、二人は宝物庫を出る。

「グロッタ」

「何だ？」

「お前も“力”を持つ者だろう？」

「……………。よく気付いたな」

「その力で、この私と殺し合うか？ お互いに仇だし、もしお前が私を殺せれば、この国に存分に復讐すればいい。もっとも、私もお前を殺害するつもりでいるがな」

グロッタは、しばし考えた後に、首を横に振る。

「復讐なんて考えたくない……」

「そうか」

この話は、それで終わった。

しばらく沈黙が続いた後、グロッタが口を開く。

「なあ、ナーエ。『ドラゴンの塔』に共に行ってくれるか？」

「塔？ 何故だ？」

グロッタは答えなかった。

「とにかく、一緒に行って欲しい」

彼は十数年以上も前に、彼女と塔の前で約束した事を覚えている。お互いに花冠を付けた。そして、手作りの花輪でお互いの指に蔓で出来た指輪を通した。

塔は高い丘の上にあった。

しばらくの間、再び、二人は無言だった。

途中、大きな橋の上を通った。

蔓や苔によって蝕まれた、ろくに舗装もされていない橋だった。

橋を過ぎると、丘の上へと向かう道が見つかった。

やがて。

ナーエとグロッタは塔の前に辿り着く。

ナーエ、ぼうっとした顔で、塔を眺めていた。塔はまるで無傷だった。少し前に、ロタンの力で、国全体が災害にあったのにだ。

「ナーエ」

「何だ？」

「俺は……、お前の事が好きなんだ。毎日のように、お前の事を考えていたように思う。お前は、この惨めな俺にとっての希望であり、光だ。なあ、この塔の前で、子供時代、二人で結婚式をした事を覚えているか？ 指輪も、教会から白いカーテンを盗んできて作ったウェディング・ドレスをお前は着てさ。その……、」

「すまない……………。覚えていないんだ」

ナーエは首を横に振る。

グロッタは塔に片腕を置き、嗚咽を漏らす。

彼女の言葉は、容赦が無かった。

一体、何が今の彼女を作ったのだろう？

「まさかとは思うが、私の妹のリーベと勘違いしていないよな？ 妹は好色で、色々な男と関係を持っていたからな」

「いや、ナーエ。お前だよ。俺はお前が騎士になる日も、陰からずっと見ていた」

グロッタは顔を押しさえる。

ナーエは仕方無さそうに、塔に、もたれかかる。

石の壁が冷たい。

「ナーエ、俺はお前が好きだ。お前と生涯を共にしたい。叶わないなら、お前を殺して、俺のモノにしてやりたい……っ」

「悪い。私はお前の思いには答えられないよ。何故なら、私はお前を忘れていて、きっと、未成熟な幼少期における、オトナの真似事をお前と一緒にやって、その記憶は、忘却の河へと流れてしまったんだ」

「残酷だな」

「私も、……色々あったんだ。辛い事も、失った事も、今の私はこの国を守る為のみに、存在している。私も、なんていうか、悲しいんだ。きっと、この苦しみは消えない……、私は今や、……ロタンを殺す為のみに、この世界に留まっている」

騎士は剣を引き抜き、墓守へと翳す。

「お前がロタンを崇拜しているという事実が、私がお前への憎悪を掻き立てる。なあ、互いに殺し合うか？ お前にとって、この国はお前を虐げるだけの存在だったろうがな。私にとっては、紛れもなく、掛け替えのない故郷なんだ。お前は故郷への思いが分からないんだろ？ 同じように、私はお前の苦悩なんて知らない」

「なんだよ、その言い方っ！」

「私をムリヤリ、カづくで手にしてみるか？」

そう言われ、グロッタは激昂する。

「俺は、俺はなっ！ お前の身体じゃなくて。心が欲しい……愛が……」

「どちらも無理だな、私は生身じゃないし、何よりも……」

そして、彼女は死刑執行人のように告げる。

「恋愛はね。……私は他人を愛する事なんて出来ないし、愛されたいとも思わないの。私が愛しているのは、この国家であり、国王であり、国民全員なんだ。私達の言葉は分かり合えないんだ。まるで違った価値と、“信仰”に生きているんだ」

ナーエは奥歯を噛み締めていた。

グロッタは、咽び泣く事をもはや隠さなかった。そして、彼はあらん限りの咆哮をする。

3

その夜、グロッタは一人、自らの寝床に戻って、泣き続けた。

支えるものなんて、もはや何も無かった。

彼は錆びた短剣で、ひたすらに自らの両の手首を切り裂いた。紅い血が流れる。生きている実感がした。自らにまだ命が灯っているのだと感じた。

彼女は強者で、自分は弱者だ。

彼女は死者で、自分は生者だ。

運命は重ならず、自分の人生がゴミクズのように思える。

泥の底が、更に深く感じたように思えた。

十

星空が天空には広がっていた。

流星がまたたいている。

ナーエは塔の傍にいた。

此処からは、ナベリウスがよく見える。

けれども、彼女は空を見つめていた。

美しい、澄んだ星空で、星座が瞬いていた。

彼女は、過去の面影を振り返る。

.....グロッタ.....、確かそんな少年の面影が記憶の底に滞留していた。

手を握り合って、未来の事を語り合ったように思う。幸せな未来をだ。

けれども、この世界の理は、運命の車輪は二人を同じようには動かさなかった。運命という列車があるとすれば、きっと別々の場所に行き着くしかなかったのだろう。

グロッタは、騎士になりたいと言った。

ナーエは、.....、かつて自分が、漠然と、普通の家庭を持ちたいと言ったようにも思える。.....上手く思い出せない。風のように散ってしまった。

人間は変わってしまうのだと思った。

自分は、きっと変わったのだろう。

ナーエはこの国の半壊に、深い悲しみと絶望と、自らがいつ消滅してもおかしくないという不安に苛まれている。そして、自身の弱さに憤っていた。

あのグロッタも、違う形で絶望の底にいるのだろうか。自分に復讐するのか、もしくは、ムリヤリ力づくで襲うのか。しかし、心が欲しいと言ったか。他人の心なんて手に入るものなのか。洗脳、暴力による恐怖などでしか手にする事が出来ないんじゃないのか？

嘲るしか、答えを返せない.....。

十

数日後、グロッタは娼館に向かった。

何もかも、ヤケな気持ちになっていた。

宝物庫で貰った服飾なら、自身が墓守だと思われない。それに、半壊したナベリウスの中、彼の素性を気にする者など少ないだろう。

貯蓄を切り崩した、高級娼婦も買える筈だ。

彼は、ナベリウスの猥雑な区画へと向かった。

以前から、この場所には、不法移民などが存在している。

酒場は多く、賭博場があったり、違法薬物などが出回っていた。

しばらく彼は、辺りをうろついていると、入る娼館を決めた。……不法移民が多く、滞在して
そんな場所だ。

入口には、女衞が、薄ら笑いを浮かべていた。隣では、別の女衞が、若い女とやり取りをして
いた。売春の勧誘か何かかと思ったが、どうやら、此処は、女同性愛者は断っており、別の店で
訊ねてくれ、という話をしているみたいだった。

とてつもなく、いかがわしい場所だ。

彼は思いきって、入口にいる男達に話し掛けて、料金を訊ねる。

聞いていた金額の半額程度だった。

やがて、案内されるままに部屋に行くと、娼婦が出迎えてくれた。

彼は娼館の中で、しばらく娼婦と会話だけをした。

この国にいない、黄色い肌の女だった。

美醜はよく分からなかった。

彼は、その娼婦に、強く抱き締めて貰った。

そして、強い悲しみがこみ上げてきた。……商売女は身体を提供してくれても、心をくれるわ
けでは無い事に気付き。

しばらくして、彼はその娼婦に何もせずに、金を払って、娼館を出た。

その後、居酒屋を渡り歩いて、酒を飲み歩いた。

最低な人生の積み重ねだった。

気付けば、酔っ払い専用の簡易牢屋にも、一夜ブチ込まれたりもした。

破滅的な行動に走りつつあった。

誰にも、認められていない、という空虚感が、強く彼の心を支配していた。

ナーエの事を忘れられそうになかった。

十数年、二十年近くの心の支えだったから……。

何処まで自分が落ちていくのかを知りたかったが、気付けば、墮落していく事さえもバカバカ
しくなってしまった。

数日して、彼はドラゴンの塔へ戻った。

騎士の装備と剣を纏っていた。

ナーエを殺そうと考えていた。

十

幽霊の女騎士は、相変わらず、星空を見ていた。

グロッタは、何もかもが、どうでもよくなっていた。

そして、ヤケになった感情で、半分、酒に酔った勢いで言葉が出てくる。

「考えたが、やはりお前を殺して、この俺も自害しようと思っているっ！」

ナーエは、少し面倒臭そうな顔になる。

「グロッタ」

「なんだ？ 命乞いか？ だが、どうすればお前を殺せる？ 幽霊でも死ぬのか？」

「“魔法”や“特殊な能力”なら殺せるわよ。ねえ、考えていたんだけど、もし貴方が此処に戻ってくるようなら、共にこの塔の中に入ろうと思っていたのよ」

ナーエの口調は、心なしか柔らかくなる。

けれども、相変わらず、その心の底には、何の感情も、感慨も、抱いていないように思えた。

「聞いてくれないかしら？ グロッタ。私は力が欲しい。私はな、お前には、理解出来ないかもしれないが。私は化け物になりたいんだ」

彼女の声音、瞳は真摯だった。

「グロッタ。お前が湖畔近くの岩で、私に声を掛けてくれた事は、私にとっての運命なんだ。グロッタ、多分、お前は私以上の力を有している可能性があるんだ。……分からないかもしれないけど、……」

墓守は、彼女の言葉に呆然としていた。

彼女は自分の事を、認めてもいるのか……？

「この塔が何か知っているか？」

グロッタは首を横に振る。

分かるわけがない。

「この国には、伝統として『騎士』があるが、それは国家を守る者だ。そしてお前、『墓守』は移民だな。元々は奴隷だ。そして、この国の民族精神、民族概念、国家概念を支えているのは何か？ それは、この塔なんだ」

「塔……？ 何を言って……？」

「硬く閉ざされている塔の中には、ドラゴンが住んでいる」

「……、伝説だとばかり思っていた……、確かなのか？」

「とにかく、入るぞ」

ナーエは、何重にもなっている錠を既に壊していたみたいだった。

彼女は扉を開ける。彼が後に続く。

十

松明に明かりを灯す。

どうやら、二つの螺旋階段があるみたいだった。

「老朽化しているのか、畏なのか知らないけど、グロッタ。階段は昇るな。途中で外れて何処かに落ちるぞ。二階へと跳躍出来るか？」

「あ、ああ」

二人は助走を付けて、二階へとよじ登る。

二階に昇ると、今度は地下へと通じる通路があった。

ナーエは慎重に、剣を手にしながら階段を降りていく。

しばらくの間、二人は長い階段を下っていた。

途中から、螺旋階段へと変わる。

途中、ナーエは硬く閉ざされた窓らしきものを見つけて、それをムリヤリこじ開ける。すると、窓の外にはナベリウスの景色が広がっていた。

「……なにこれ……？ 深い地下へ降りていた筈なのに、塔を上がっているの？ そういう造り？」

「分からない……………、気付けば降りていたつもりが、昇っている造りになっているのかも……………」

ナーエは窓を閉める。

しばらくすると、大広間のようなものが見えた。

明らかに、外から見える、塔の広さの数倍以上の面積はあった。

塔の中は、異空間へと繋がっているのだろう。

十

青白い光が明滅していた。

それは見るものによっては、美しいようにも、不気味なようにも感じられるものだった。

それは水晶の光を放つものだった。

この世のものではない、異空の色だった。

蒼く、碧色の色彩を放つドラゴンだった。

ナベリウスの伝説そのもの。……伝説の中では、その体躯は諸説あったのだが。

騎士の女は、とても嬉しそうな顔をする。

きっと、人生の一番の輝きを手に行っている思いなのだろう。

ナーエは右膝を地面に付け、自らの剣を地面へと突き立て、恭しく、その存在を敬う。

対するグロッタは、ひたすらに戸惑い、警戒心を露わにしていた。

二人の間に入らないように、柱の陰での静観を決める事にした。

「お前は力が欲しいのだろうか？」

竜は、尊大にも、慈愛にも感じられた。分からない。

「私は『神鳴る剣』の継承者です。私では、この国を救えない。どうか御力を……」

彼女の言葉は真摯だった。

今にも、慟哭してしまいそうにも見えた。

「ロタンの出現を我は見守っていた。無論、ロタンに対しては、我は傍観者を決め込むつもりだ。これから先に訪れるであろう、災厄もまた、この国の国民自身の手で解決するべきだ」

「私達自身の手ですか？」

「この国は、他の小さな国を植民地にしてきた歴史がある。そうやって豊かになった。他国への差別感情は根強い国だろう？ そのツケが回ってきたのだ。だから、お前達は戦って、権利を勝

ち取るべきだ。だが、私の出来る事なら、力を与えられる」

蒼いドラゴンからは、表情が読みとれない。

グロッタは、柱の陰で戸惑っていた。

「それで、私はどうすれば良いのですか？」

「私は見守るだけだ。お前が、お前達、ナベリウスの国民が、この国をどうにかするべきだ。私はあくまで傍観者なのだからな」

更に、何度か、ナーエと竜とのやり取りが交わされていた。

「騎士よ。お前は爆弾を知っているか？ 隣国が作っているだろう？」

「知っております。私が幽霊になり、死後の世界で、それらを見てきました。銃器も戦闘機も、そしてロタンは二度目の襲撃の時に、それらと融合させた幽霊達を集めてきました。国民達は、未知の攻撃にさぞ、混乱したでしょうね」

「私は、この数百年の間、密かに、それらがこの国で使われないように、策謀を行ってきた。この国に流れている魔法の力は、私のエネルギーそのものだ」

「存じております」

「私はかつて、巨大な爆弾によって、文明が滅びた異世界を見てきた。この国が、そのようなものを使い始めれば、この国は終わるであろう。その為に、私はこの国の技術の進歩を調整した」

「……………、私には判断しかねます」

「正直で良い。私自身、その是非は分からない。だが、医療に関しては、人々の恩寵を与えてきたつもりだ。この国の者達は、様々な疫病の耐性が高い。薬物の発展を妨げないようにしてきたからな。それから、福祉、教育を充実させた。それは、この国の創設以来、曲がっていない」

「それは、とても深く感謝しております……」

どうやら、ナーエと竜にしか分からない話みたいだった。

完全に、彼は蚊帳の外だ。

ナベリウスの秘密が、次々と明かされていくが、グロッタにとってはどうだって良い事だった。そもそも、自分は“国民”として認識されていなかったのだろうから。

それよりも、自分が今、どうすればいいのか分からない。

その事実だけが、今の自分が思考すべき事だった。

十

「グロッタ。再度、釘を刺すけれど、私はお前の戯言になんとも興味が無いんだ。お前は私を負へと引きずり込んでくる。お前には何の力も感じないんだ。もし、お前と恋愛関係とやらになったとしても、私が一方的に損をするだけだ。私は前を目指しているから。……分からないか？」

「……………俺の、俺の気持ちはどうなる。……十数年以上も……」

「知らないよ。子供の戯言を引きずられても困るよ。私はお前と結婚でもしてお前の子供でも産まないといけないのか？ 私は使命がある。その使命こそが、私の人生そのものなんだ。絶対に

やり遂げなければならないし、やりたい事でもあるんだ。お前には申し訳なく思うけど、私は前に進むよ」

彼女の言葉は、何処までも辛辣だった。

「ナーエ、お前の手伝いをするよっ！」

「駄目だ。お前は“力”を有していない。だから、その、やっぱり駄目なんだ。私が十数年培ってしまった、この国への愛郷心や“墓守”への差別感情を抜きにしても、お前と一緒にやれない。私は強くなりたいんだ、私は弱い自分、この国を守りたい自分を赦すわけにはいかないんだから」

グロッタには、受け入れる事がとても辛かった。

自分の何もかもが崩壊していく……。

色の無い世界に取り残されてしまった気がした。

ナーエはワガママで身勝手なのだろうか？ いや……、自分の人生を二十年近くに渡って、彼女に固執してきた自分の方が異常なのだろう。理解している。

嘘と裏切り……。

人生のバカバカしさ。

こんなにも、生まれついた人種が違う、というだけで、扱われ方が違うのか。物心が付いた後、この十数年の間に、散々、身に沁みて分かった事だ。

自分は選ばれなかった。

誰も、自分を愛してくれはしない。

自分の人生は呪われているのだ。対して、ナーエは祝福されている。

この惨めさは何なのだろう？ 世界全体から侮辱されているように感じた。

この女を殺すしかないのか？

そうすれば、新しい人生が始まるような気がする。

『国王とドラゴン』

ナベリウスは『独裁的だが、自由な国』である。

選挙制度が存在し、貴族、平民の中から、国王の政治を行う大臣が存在する。国王は、あくまでも、大臣達のまとめ役であり、代々の国王は、竜と民に仕えている、と言える。

貴族、平民、そして大臣達の作り出した文書は、国王が授与する事によって、初めて制定される。なお、ナベリウスの国家条約は、所謂、『聖典』、『竜の誓約』の二つを下敷きにして、作られている。『竜の誓約』は、騎士などの一部の人間のみが読むが、国民の基本的な教養として、法律の基礎となる『聖典』と、それを教える大聖堂は、ナベリウスにとって、必要不可欠なものとして存在している。

1

大聖堂にて、祈りを捧げている時に、彼女は現れた。

死人のような表情の女だった。

何となく、生者では無いような気がした。

若く、聖職者を目指しているエサルは、同時に騎士にも憧れていた。彼は、どちらの道に進もうか悩んでいる処だった。

「お前は騎士志願者だな」

「ええ、そうです。貴女は……………」

「私はこの国の騎士をしている。玉座の隣を守る者だ。国王とのやり取りもしている」

「そのような方が、僕なんかの下に……………」

エサルは、何者か分からない相手に対して、あまりにも簡単にその言葉を信じた。

無垢な程に、信じた。

彼女は言葉を続ける。

「この国は、今や幽霊達の襲撃において、破壊の痕が残っている。そして、国王の側近達が出した選択は、移民を入れていく事だ。各地を放浪している、ならず者達を、この国が引き受けるのだ。だが、私はそれが許せない」

彼女の言葉は力強かった。

「お前は若いだろうが、もう成人したか？ 二年前のナベリウスの崩壊を知っているだろう？ お前はいくつだった？」

「僕はまだ、十七です。二年前の事はよく覚えています。僕は今、歩哨の見習いをしています」

「成る程」

女は明らかに、人外だった。

かえって、その事実が、エサルが彼女に従おうと心から決めていた。

信仰によって、偉大なるものが自分を認めてくれたのだ。

これまで、聖典を真摯に読みあげてきた事が報われたのだ。

「二年前に、この国が滅び掛けたのは知っているな。四年前にもだ。国家の復興は未だ行われていない。二度の死霊術士の襲撃によって、滅び掛けた」

彼女は強い遺恨を残しているみたいだった。

「四年前に、私は命を落とした。今や事情により、幽霊となって、この世界に留まっている」
闇に紛れているが、甲冑の腹部周辺にコブラの紋章が見えた。

そう、確かに彼が憧れていた騎士の者なのだ。

「お前の名は？」

「エサルと申します。聖職者……見習いのエサルです。これから、聖職者の道を歩くべきか、騎士を目指す為に、歩哨になるかを考えていた処なのです」

「そうか」

彼女は、少し含むように告げる。

「お前は純粋なナベリウスの血筋で、そして、敬虔な信仰者だ。何よりも、若い。お前にはこの国の未来を担って貰う。問うぞ？ お前はこの国を愛しているな？」

「はい、僕はこの国を誰にも負けないくらいに、愛しております。この国の文化を自然を、歴史を、血筋を、伝統儀式を、宗教をです」

彼は力強く言った。

「これは重要な質問なんだが、お前は『墓守』は嫌いか？」

少年は、何の疑問も無く答えた。

「ええ、汚らわしいです。この国が襲撃される前に、墓守達は不審な動きをしていたと聞かされています。一説によると、他国からやってきた邪悪なる魔術師が、この国を破壊したのは、墓守達の助けによると聞かされています」

「移民を受け入れる政策については？」

「全然駄目です。我々の人口は壊滅的に減りましたが、それでも我々だけでこの国を創るべきだと。何百年もの歴史がありますから。それをこれから何千年も続けていく。それこそが、この国の信仰心ではありませんか」

その言葉は、彼女にとっても満足感を与えるものみたいだった。

「素晴らしい。お前はこの国を愛する心に偽りは無いだろう。明日の夜、また会おう。此処でだ。連れて行ってやる。お前が信じる、聖域にだ」

……………

エサルは、この瞬間に、人生最大の幸福感を得ていた。

お告げは唐突にやってくる。

この国の宗教を強く信賴していて、とても良かった、と心から感じたのだった。

二人は階段を登っていく。

古き場所で、所々が朽ちていて、何か得体の知れない者達がいくつも潜んでいそうな場所だった。

「この残酷な世界で生き延びるのならば、非情さが必要な。私は殺す側を選ぶ、墓守の血統はこの国には必要ないし、移民も私は受け入れない。この国がボロボロだからこそ、それは確信している。私はこれ以上、ナベリウスという民族が汚されるのを赦すわけにはいかない、絶対に赦さない」

竜の塔は、ナベリウスの象徴のようなものだった。

代々の国王でさえ、入れないと言われている。

特別な騎士でないと、此処には入れないのだ。

少し前まで、一庶民でしかない、自分などが入っても良いのだろうか。

ただ、彼女は、自分などをこの塔に入れてもよい権限があるみたいなのだ。

「エサル。お前もいずれ、騎士になれ。私がお前を保証する」

彼は、呆けたような顔になった。

何を言われているのか、理解出来ずにいた。

「お前が、そして私が仕えるべき。国王さえも、彼の下僕である竜の下に、お前を連れていこう」

十

「待っていたぞ。竜の声を聞こえし者」

この国を守護する蒼き竜が、二人を見下ろしていた。

蒼白のドラゴンだった。

背後に、クリスタルのような氷の結晶が伸びていた。

ナーエは、膝を付き、頭を低くする。

そして、儀式的に、己の持つ剣を真っ直ぐに地面に突き立てる。

「竜神さま。恐れ多くも、稲光と氷雪を司る者よ、私達に御命令を」

ナーエがかしづきながら、告げる。

「そこの少年。もう少し、私に近寄れ、お前に力を授けよう。剣を我に向けてかざしてくれないかな？」

ドラゴンは、静かに、口を開いていく。

エサルは言われた通りにする。

すると、雷の筋が走る。

「お前には零度の力を授けよう。触れる者全てを枢へと詰め込むのだ。その為の力だ」

その力を得て、エサルは、自分が絶対的な何かになれたような気がした……。

十

竜の神、直属の騎士。

それは、ナベリウス建国以来の誇り高き称号だ。ある意味で言えば、国王よりも高い地位にあるのだ。

普通の騎士達でさえ、その座に就く事は滅多に無い。

若いエサルにとって、それは余りにも、自らの自我と自尊心を暴走させる程に、魅力的な力だった。

大いなる勅命なのだ。神直属の使命を背負っているのだ。

彼は、墓守と移民を殺し続ける事を誓った。

それを狂信する事に決めた。

そして、それが民族としての成長なのだと、彼は考えた。

十

ナーエが、何故、グロッタに鎧と剣を与えたのか、彼女自身分からなかった。

あくまで、タダの騎士の鎧だ。

自分の今の竜の騎士という、役職とはまるで違う。

一介の騎士の鎧に過ぎないし、鎧を着たからといって、騎士という立場になれるわけではない。

。

だが、グロッタは、夢を語っていた。

ずっと、子供の頃から、騎士になりたかったのだと。

形だけでも、叶えさせてやりたかったのか……？

……どうにも。

思考が、まとまらない。

グロッタの存在は、自分の愛国心に少しの揺さぶりをかけてきた。

エサルには、国民を偽装する者として、彼らは地位を欲しがめる者達なのだから、その皮肉として、鎧と剣を与えてやったと告げた。エサルはその言葉を信じた。

あの若い、信仰者は、良い騎士になると思う。

きっと、どんな事でもやってくれるだろう。

墓守は、ナベリウス国民と同化する事など無い。

それが、ナーエと、そしてナベリウス国民の一般的な認識だった。

2

自分の血は汚れている。

それが、グロッタの中にある妄念……あるいは、現実だった。

ナーエに会って感じているのは、彼女の中に傲慢さが強く芽生えている事だった。もしかす

ると、子供の頃から自信は強かったのかもしれない。

娼館に行った時に、女を買う事は無かったが、女の一人からメモを渡された。個人的に彼と会いたいというのだ。

グロッタは地図に記された場所に向かう。娼館から少し離れた場所にある、貧困層が集まっている区域だった。

「お前、名前は？」

「……シジールと言います」

「お前、この国の者じゃないな？」

「向こう側の国から馬車に乗って、長旅で来ました」

「湖を隔てた場所だな」

「ええ」

彼女の告げた国は、今、経済的に傾いている。暴動も多いらしい。だから、此処に来たのだろう。

ナーエを殺す事ばかりを考えていた。

移民の売春婦。

自分は”墓守”だ。境遇は……似ているのだろうか？

十

シジールの部屋で、グロッタは彼女を抱いていた。

黄色い肌に、黒い髪を結わえた女だった。

女性体験はこれが初めてだった。……ナーエに誓いを立てていたから。だが、ナーエは自分なんてゴミクズのように見た。

人間扱いされた事なんて、これまであったのだろうか？

きっと、眼の前の女も、そうなのだろう。

「なあ、お前。お前の故郷はどうだった？」

「貧しかったです……」

「そうか」

「私は教えにそって、子供の頃から、窃盗をして生きてきました。……私達、リンゾ・トング国においては、貧困による窃盗は神から赦されます。……でも、現実には、窃盗犯は兵士達に私刑にされ、手足に障害を持つ者達も多い……」

「そうか……、なあ、処で、此処には慣れていないんだな」

彼女はうつむきながら、嗚咽を漏らす。

「私のような人種への差別が強いです。この国の人達……」

「そうか」

自分が惨めで仕方が無くなる、ナーエの地位はとても羨ましいものだった。

自分の中で、渦が巻いている。

自分の中に、怪物がいる。

女に対する敵意が芽生える……、女、というよりも、ナーエだ。彼女は美しい白い肌をしていた、眼の前で抱いている女は黄色い肌だ。自分達とは違う人種なのだ。それを考えるとハラワタが煮えくり返ってきた。何故、こんなみすぼらしい、異国民の娼婦を、初めての体験にしているのだ……？

殺してやりたい……。壊してやりたい……。

彼は気付けば、いつも持っている小剣で、自らの手首を切り裂いていた。

十

気付けば、シジールの腹には、大きな孔が開いていた。

自分が刃物で突き刺したのだろう。

彼女は白目をむいて、絶命していた。

「あれ、俺がやったのか……………」

自分は、ナベリウスの国民だが、彼女のような移民は違う。

それこそが、自らにとっての存在意義なのだ。

そして、やはり此処は自分の故郷なのだ。彼らのような存在を認めるわけにはいかないのだ。

彼は売春婦の腹から、小剣を抜き取る。

血は余り、飛び散らなかった。

彼は不思議に思って、女の腹の辺りに触れてみる。

すると。

彼は血の球を手持てる事に気が付いた。

どうやら、ボールのようになっている。彼はそれを壁に叩き付けてみる。すると、壁が血溜まりになっていた。

彼は、その後、自らの地下の家へと帰り、自らの腕に傷を入れていく。

温かい血が流れる。

自分は生きているのだという実感が湧いた。

命運は全て、分かち合わない。

自分はこの世界にどんな影響も与えないまま、死んでいくのだ。それは、とてつもなく悔しく、そして怒りばかりを感じていた。そもそも、生まれ落ちた瞬間から、命の価値が固定されている。どうして、その事実を憎まずにはられないのだろうか？

命には格差が存在するのだと。

そしてきっと、みなその欺瞞を見ようとはしないのだ。

グロッタは。

シジールと名乗った、リンゾ・トングという国からやってきた異国民の死体をそのままにして、部屋から出ていく。

彼の隣には、何かがあった。それは、蒼い、彼が幼い頃から見ていた、死神だった。いつか、彼

を殺すであろう、彼の力そのものである、死神だ。

十

グロッタが、ナーエから譲り受けた鎧と剣は、今や忌むべきものだった。烙印だった。

国民を偽装する者としての、侮辱の証なのだろう。

そう、判断する事にした。

けれども、もし……。

彼女が自分を認めてくれたのならば……。

この鎧を着て、剣を振るい、彼女の為に役に立ちたい、と誓っていた。

十

墓守達の集団が集まっている酒場だった。

この区域は、特に墓守達が住んでいる場所だった。

彼らは蔑まれながらも、それなりに、ナベリウスの国民達と一緒にやってきたつもりだ。

彼らがかつて、死体処理などを通して、発見した技術によって独特の料理が売られている。中には、ウジなどを食材に使ったものもある。それは衛生面を考えて、今の墓守の間では嫌がられているが、珍味として食べられる時もある。

食文化の問題があって、墓守達は煙たがられたりもしていた。だが、今では、ナベリウスの伝統的な料理が基本的な食事になっていた。

墓守達は談笑しながら、酒を飲んできた。

独自に、麦を加工して作ったビールだ。

その味は、ナベリウスの一般市民にも、広く認められている。

酒場に入ってきた、一人のナベリウス国民の少年を見て、その場にいた墓守達は、愛想笑いをする。

「お前達を死刑にしに来た」

「何だよ、酔っているのかよ？」

墓守の中年男の一人が、そう返す。

エサルは、頭の中が、真っ赤に染まっていた。同時に、酷く冷静でもあった。

それは。

有無を言わせない攻撃だった。

中年男は、枢型をした氷へと閉じ込められていた。

全身氷漬けで、体温が急激に下がっている。彼はもう助からないだろう。

「お前達も始末する」

少年は剣を抜く。

問答無用で。

少年は逃げる男の一人の腹を、剣で勢いよく突き刺す。容易く貫通する。血しぶきが舞う代わりに、噴き出す血は途中で凍り付き、男は見る見るうちに、氷の彫像へと変わっていった。「竜神さまから授けられた、この力、『アイス・コフィン』。何と素晴らしいのだろう？ これで、墓守も他の異民族達も、皆殺しに出来る」
彼は嬉々とした目で、凍り付いていく、墓守達と、その区域を眺めていた。

十

エサルは、彼女の為になら、どんな事でもしようと思っていた。
そばかすだらけの顔で、ぱっとしない自分を、認めてくれた。
彼女と国家、竜神の為になら、どんな事でもしようという決意があった。
その為に、どれだけの辛い任務も受け、犠牲も覚悟していた。
恐れ多くも、エサルは、ナーエという幽霊の女騎士に対して、恋心を抱いていたのだった。凛々しく、気高いが、魔性の女だ。
彼女の為になら、何でもやろうと思った。
そう、何でも、赦されるのだ。
エサルは、誓う。
墓守達の居住区全てを、氷の凍土にしてしまおうと。
そして、純血なる美しき国を作り上げよう。
人間種は平等では無い。
命には、選ばれるべき順序があるという事を教えてやろう。
彼は、自分自身の力を、とても愛おしく感じていた。

十

墓守の居住区が襲撃されたのを知って、グロッタは、何とも言えない感情に襲われていた。自分の立ち位置は何なのだろうか。
今、自分の所属が、属性が、分からない。
自分はシジールという移民の娼婦を殺した。
それも、移民だから気に入らない、という理由でだ……。
グロッタは自らの力の名を『ペイル・ホース』と名付けた。死の馬だ。蒼ざめたる馬だ。そして、自分は血を操る力を持っているのだと分かった。
そう。
ロタンの言葉を、その存在を心の支えにして、自分はこの国に革命を巻き込もうと考えているのだ。
きっと、何かを壊したいと願っている。
激しい激情の赤と、冷徹なる氷結の蒼。

どちらが、この国家の覇権を握り締めるのだろうか。

自分は悪でいい。

しかし、同族の墓守達は違う。

十

国王は、特殊自警団を設立した。

それは、犯罪を犯す、異民族を討伐する為の自警団だ。

それを、望んだのは、一部の墓守達と……。

そして、捉えられた、更に一部の異民族達だった。彼らは、犯罪者達を取り締まる事を強く望み、自らの無罪と自由を訴えた。

十

ナベリウスの騎士団と歩兵の下、罪を犯した異民族達が、両腕と、両脚を、縄によって一斉に括り付けられていた。彼らはある処刑場の下にまで歩かされていく。

そこは大きな井戸だった。

中には、ワニ達が大量に飼われていた。

森を通り抜けた沼地から、集められた生き物だ。

騎士団の一隊は、容赦する事が無かった。

異民族達は、次々と、井戸の中に放り込まれていく。

獰猛な水辺の猛獣達は、彼らに容赦無く牙を向けていた。

血が溜まり浮いていく。

十

一部の墓守達は、ナベリウスの国民達との交渉に成功しつつあった。

真に興味なのは、自分達ではなく、異民族であるのだと。

やがて、ナベリウスの国民達と、墓守達の連帯が始まっていった。それは、強い絆になるだろう。

十

異民族達は、最初、この国にやってきた時、貧しい者達が多かった。その為に、よくパンやハムなどを盗む者達が多かった。特に『リンゾ・トング国』の者達が多かった。

パンは、このナベリウスの誇りだ。

この国の『聖典』にて、パンや小麦を盗む者を、厳しく罰しなければならない、とされている程

の罪だった。

一面の小麦は、雄牛を守り神とする農夫達が丹念に作ったものだ。この大地と密接に結び付いているものだ。それを略奪しようとする、異民達の刑罰は、晒し刑というものに処される事になった。

この晒し刑というのは、十字架状の木材に首と両腕を拘束する刑罰だった。垂直の一本の棒の途中に、頭と両腕を入れる丸い孔が開いた長い板が釘で止められていた。板は開く事が出来て、そこに囚人の頭と腕を入れると、閉めて、鍵を掛ける事が出来た。そこに、二、三時間程度、囚人を晒しておくのだ。長い場合は一日以上も放置されていた。その道具を載せている円形の台座は回転させる事が出来て、集まってきた民衆が好きなように、その囚人を全方向、眺める事が出来た。

晒し刑に処された囚人は、民衆から次々と、石や鈍などを投げ付けられる。

異国民が、パンを盗んだ罪は重い。

これは、ナベリウスの恩寵そのものだからだ。

国民でさえ、パンや原料となる小麦を粗末にする事は、嚴重な注意を受ける事が多い。パンを道端に捨てる事は、罰金刑になる事もあり、腐ったり、カビたりしたものは、家畜にやったり、肥料にするように言われていた。

晒し刑にされた囚人達の多くは、そのまま死亡する事になった。そうでなくても、失明や四肢の重い障害を負うなどの後遺症が残った。

その文化を知らずに、入り込んできた異民族達は、急遽、パンではなく、他の食糧を盗む事になった。ワインやチーズ、ハムや牛肉、野菜や果物などが多く盗まれた。パンの代わりとなって、ジャガイモが特に多く盗まれた。

パン泥棒は、信仰への冒瀆である為に、住民達を激怒させる事になったが、他の食糧は、それ程、住民の怒りを買う事は無かった。せいぜい、何日か、長くても、何週間か、禁固刑を食らう程度だった。

十

グロッタは、墓守の血が汚らわしかった。

だから、何度も、自傷行為をして、悪い血を押し流そうとした。それは常習化していた。やがて、彼は同じ同胞をも憎むようになっていった。

正統なナベリウスの国民になりたい。

もしかすると、異民族を殺して回れば、自分も国家の一員になれるのではないのかと。そう、異民族は、この国の為にならない。この国の資源を貪り、土地を汚す者達だ。暴力と病気と、犯罪をまき散らしてくる者達だ。

妄執的な部分は、自分の中にも、強く根付いている。

ナーエは、自分を認めてくれるだろうか。

彼は、再び、ナーエとの接触を考えていた。

十

強い国家を取り戻さなければならない。

ナーエは、宮廷魔導士なども探していた。

だが、強力な魔導士達が育つのは時間が掛かる。

それよりも、兵隊達に武術を教える方が早いだらう。

いや、いっそ、自分達で統治するしかないかもしれない。

竜神は、ナーエとエサルに率先して力を授けてくれた。

自分達は、この国家の象徴から、認められている。

それは、とても心強い事だった。

国王は、あくまでも、表向きの統治者として動いて貰う。かつて強く忠誠を誓った男だが、今や、その忠誠心は、あくまで竜神へと向けるべきだ。ナーエはそう考えていた。

だが、この国の国王、コンスティルは心から尊敬している。

彼への忠義心もまた、軽んじるべきではない。

十

幽霊に憑かれた。

そのような病気が、ナベリウスの国内で流行っていた。

彼らは、日々、幻覚と幻聴に侵されて、幽霊を見続ける。酷くなると、暴れ出す。そんな彼らが手に負えなくなって、ついには、安楽死の法案の署名が、国王に向かって集まっていった。

.....

幽霊憑きは治らない。

彼らは死ぬ事によって、神の国に向かうしかない。

薬術士達は、彼らの為の毒薬の調合を考えていた。

それは『向精神薬』だった。

大半の者達は、国家の頹落に対して、恐れをなしていた。あらゆる伝染病や未知の怪物達の噂で持ちきりだった。

国家全体の法律の改革が必要だ。

それが、国民全体が持っている、潜在的な意識だった。このままでは国が滅びる、侵略者達によって滅ぼされる。恐怖は新聞にも載せられ、ナベリウス中は、新聞がよく売れた。新聞屋が配る新聞の内容には、墓守、移民の犯罪は勿論の事、ある通りに幽霊が出ただの、幽霊に取り憑かれた男が、父親を殺害したただの、刑罰の在り方はどう考えるべきか、だの、そのような事が記されていた。果ては、今の大臣達の汚職事件なども記されていた。

このままでは、崩壊の一途を辿るだけだ。

もっと強い国にならなければならない。

弱かったからこそ、あの邪悪な幽霊使いの魔導士に、数年前に、壊滅的に国が破壊されたのだ

。

彼らは、とにかく外側からやってくる恐怖に対して、怯え続けていた。

農民、工匠、商人、貴族、様々な地位の者達が恐怖に日夜、怯えていたのだ。

移民を取り入れる政策を行った政治家達への糾弾が、相次いでいた。彼らをまず処罰して、更に、移民達を同時に粛清する法律が作られないか、といった抗議活動が行われていった。

十

グロッタは、墓守の居住区に、上の空のまま向かっていった。シジールを殺した、その脚での事だった。

酒場に入る。

どうやら、別の墓守の区域が襲撃されたらしい。

その話で、持ちきりだった。

「よう、グロッタ」

「グロッタ、どうしたんだよ？ 何かあったのか？ 元気出せよ、酒奢るからさ」

彼は現実感を伴わない、浮遊感に見舞われながら、辺りを見回す。

すると、友人のジュタルとゼールシュの二人がいた。十代の頃に出会った親友だ。

「なんだよ、もう酔っているのか？」

「なあ聞いてくれよ、ヴォールデユスのクソ親父が、まだ威張り散らして、給料を払わないんだよと。あの親父、いつか酒瓶で思いっきりブン殴ってやる」

二人はハーブ酒を飲んでいるらしく、かなり酔っているみたいだった。

みな、飲みながら、墓守襲撃事件に関しての話が、ヒートアップしていた。

夜更けになる。

グロッタに酒を飲んでいった。

ジュタルが、彼に声をかける。

「なあ、今の世の中は世知辛い。グロッタ、お前には俺達とは違うものを持っている。お前の力を俺達は知っていたぜ、お前の親父さんから聞いたしな、なあ、一つ、『神殿』に入ってくれないかな？」

グロッタは、吐きそうな口を押さえる。

「……………あそこは、墓守でさえ立ち入り禁止だろ？」

「でもさ、襲撃事件が、また起きたんだよ。別の場所だ。全員、何故か氷漬けのマグロみたいになってしまっている。いや、もっと酷い、巨大な氷の中に詰め込まれて彫像になっている奴もいた。……不思議な怪奇現象だろ？ 幽霊の仕業って言っている奴もいるけど、俺は”お前と似たような力”を持つ奴の仕業だって見てる」

「何だよ？」

「だからさ、お前、神殿に行ってくれないか？ お前には資格があるんだ。こういう異常事態

になった時に、神殿に入る事が赦されるんだ、だから行ってくれよ」

「いいよ」

「お前には何か力がある。いざとなったら、俺達を守ってくれよな？」

「ああ……勿論だ」

グロッタは、自らの両手を見ていた。

昨日、……もう二日前か、シジールという移民の娼婦をこの手で殺害したのだ。人を殺してしまった事で、自分が別の何者かへとなってしまったような気がした。

十

墓守達、独自の文化を形成している神殿は、墓守の居住区にある。

そこには、彼らの中においての番人達がいた。

此処は、国王や大臣達と交わした約束があって、この聖域の中において、犯罪行為を行う者は、強く罰せられる。それは人種は関係が無い。

とても廃れていて、砂埃によって朽ちかけているが、確かにそれは、ナベリウスのドラゴンの塔に対する、墓守の聖域だった。

グロッタの父親は、この先に向かってはならないと、生前、彼に何度も警告していたが、同時に、彼には、この聖域の先へ向かう資格があるのだとも言っていた。

おそらく、彼の父親は、彼の異質な才能が開花する事を勘付いていたのだろう。

彼は、墓守達の間でも、何処か自分が異民族であるような錯覚を覚えていた。

自らに、本当の意味で、故郷や仲間などいないのではないという感覚が胸の中にはあった。

墓守の襲撃事件は、ナーエの仕業なのだろうか？

自分には分からない……。

ただ、運命を動かす為には、自らも運命の中心に飛び込まなければならないのだと、そんな事を漠然と考えていた……。

『魔導士ロタンと騎士ナーエ』

四年前に、ナベリウス内において、幽霊達の軍団が現れた。それは魔導士ロタンによって、宮廷の騎士や魔導士達は、ロタンの手によって殺されて、更に幽霊として使役された。かつて、騎士ナーエは、ロタンに恋慕した妹のリーベを追って、ロタンが居住地にしている、一面の不毛地帯、『世界が終わった終焉の世界』にて、ロタンに挑むも、殺害され、幽霊化を受ける。その時、一度、彼女はロタンを退ける事に成功するが、二年後、再び、ロタンは幽霊兵達を集って、ナベリウスを襲撃する。

その時に、ロタンとナーエは戦うが、ナーエは勝利し、ロタンを再び退ける事となった。だが、その時の爪痕は深く、国家をボロボロにするのには充分であった。

ロタンとの二度の戦いにおいて、そのつど、ナーエは、ロタンと戦う仲間達を手にするが、現在は、彼らとの交流を絶ち、ただ一人、この国の未来を後の世に託す者として覚悟している。

『地下扉の向こう側』

1

グロッタは、地下世界の向こう側へと進む事にした。

番人をしている墓守達は、グロッタの顔を見ると、あっさりと通してくれた。彼らにも、グロッタが、幼い頃から、何かしらの力を持っていた為に、この先へと進む”資格”があり、番人達は、墓守の襲撃事件を知っていたからだ。

遺跡の奥へと進んでいく。

しばらくすると、壁に描かれているものが目立った。

壁には、紋章が描かれている。

獅子や竜や蛇など、多頭の頭を持つキメラの絵。

他にも、頭は竜に身体は雑種犬といったドラゴン・ドッグの絵が壁画に記されている。

不気味な絵だ。

これらの紋章は、ナベリウス国から与えられたものだ。

墓守に与えられた象徴生物は、複数の、奇形で異形の者達だった。

まるで、他の獣達と混成する事によって、グロテスクな怪物が生まれると揶揄せんばかりのものだ、たとえば、騎士はコブラ、工匠は狼、聖職者は白鳥といったように、それぞれ一つの神聖なものとされる生物が紋章として与えられている。

けれども、墓守に対しては奇形の化け物なのだ。

それも、何種類かを与えられている。

形の定まらない、忌み嫌われた怪物、そう、墓守は見られている。

そういった屈辱を、墓守達は知っていて、紋章、あるいは称号といったナベリウスの文化を嫌っている者も多かった。

境界線なんて何処にあるのだろう？

今や、自分はそんな血塗られた怪物になるしかない。

後戻りは出来ない、移民の娼婦を殺害したその日から。

自分は血と死を、この身に纏わなければならない。

それはきっと、ナベリウスの神ではない、竜の神ではない、別の異教の神が自らに道標を与えているのだろう。

自分は死を乗せる馬だ。

冥府へと誘う者なのだ。

十

扉の向こうには、洞窟が続いていた。

酷く、乾燥している。

鍾乳石が続いていた。

また、大きな扉があった。

その錠を、剣で切り裂いて、開いていく。

十

異様な砂漠地帯を歩き続けていた。

わななき声が、頻繁に聞こえてくる。

命が存在する気配がまるで無い。

虫の一匹も見当たらず、草木の一本も生えていなかった。

水辺も何も無い。

空気がある事自体が不思議な空間だった。

此処は、やはり冥府なのだろうか。

……………。

どれくらいの距離を、歩いたのだろうか。

骸骨が無数に転がっていた。その屍達は、かつてナベリウスの地で生存していた、墓守達だった。

彼はそれらを踏み越えていく。

この先に、墓守が崇める神が存在するのだ。

その者も、ドラゴンに似た姿をしていると聞く。

「貴方がア・ノモス様ですか？ 我らが墓守の神である毒竜」

グロッタは異空の下で、その名に呼び掛ける。

全身に寒気が走っていく。

極寒の中に、裸で投げ込まれたような気分だ。

その点で言えば、氷雪竜スキタリスは畏怖こそすれど、このような恐ろしい感じはしなかった

。

骸骨の一人が、カタカタと口元を動かす。

<おお、墓守の騎士か。我らが竜の代弁者だ>

<ナベリウスから来たのだな。我らが子孫だな。よく来た、歓迎する>

骸骨達は、それぞれ言葉を発していく。

「ありがとうございます」

グロッタは身を屈める。

<その鎧はナベリウスの騎士のものだな。貰ったのか？>

「ええ」

<我らは鎧を、甲冑を持たぬからな。我らが使う者は“呪い”だ。暗殺を得意とするのが、我らの文化だった>

グロッタは、彼らの話を黙って聞く事にした。

<お主は既に力に目覚めたのだな。そして興味深い>

屍達は、とても嬉しそうだった。

<分かっていると思うが、我々はナベリウスの国民を深く憎悪している。お前達の世代は知らないかもしれないがな。我々の半数以上は、殺されて、今、此処に澱んでいるのだ>

怨嗟と呪詛が渦巻いていた。

<我らは奴隷として、この国に連れてこられて、奴隷として死んだ。酷い仕打ちだった。故郷も焼き払われただろう。ナベリウスの国民達は我らを当たり前のように、豚や牛のように見ていた。これをどう赦せと言うのか？>

骸骨の一人から、言葉が漏れ出していく。

この先はもう、戻れないかもしれない。

ナーエとは、出来るだけ敵対したくはない。

2

「私は思うに、病院と監獄を徹底させなければならないと思うんだ」

ナーエは、部下の兵隊達に、命令を下していた。

「墓守達よりも、今は移民の方だ。彼らの犯罪は徹底して裁かなければならない」

何故、自分達と違う血の人間が、自分達と同じ権利を有するのか分からない。

それが、彼女の信条の根底にはあった。

「移民達は死霊術を行っているに違いない。特に、死体を我々の倫理では侮辱する、ポンジルの

者達に警戒しろ。もし、死霊術が発覚すれば、公開処刑に処さなければならない。なるべく心をくじくような始末の仕方をするべきだ」

兵隊達は、彼女の命令に応じ、敬礼する。

「異教の者達を殺せ。それが指標だ。我々は我々の信仰を守らなければならない。信仰は文化であり、文化は国家だ。そして、大地であり、この空であり、大いなる湖だ。エサル、お前がやるんだ。私は竜の言葉を聞こえし者であり、伝えし者だ。そして、お前が託宣を行動に移すんだ」

竜の意志がある限り、自分は全てが赦される。

実質的に、ナーエは、この国の支配の代弁者になっていた。

つまり、最高権力者だ。

「ひとまず、やましい儀式や呪術を行っている者は殺せ。そいつらは我々の国に紛れ込んでくるゴミ共だ。害虫なんだ。奴らをなるべく駆除しろ」

彼女は宙に向かって剣を振るい、兵達を鼓舞していた。

牢屋は沢山の囚人で満杯になっていく。

エサルと、親衛隊達が捕えた者達だ。

移民達だ。

彼らが、ナベリウスの秩序を乱すのだ。

彼らはいずれ、処刑の日を待って暮らす事になるだろう。

何名かは見せしめにした方がいい。

特に、犯罪を行った者、異教を広めようとした者達は強く罰しなければならない。

やはり、自分の国に入ってきた者達は、一層するしかない。それ以外には考えられない。そうでなければ、またこの国は窮地に立たされてしまうだろう。

十

グロットが苦心の末に考えた事は、ナーエ以外の者達の殺害だった。弱腰かもしれない。だが、墓守に手を下した者は殺害するつもりでいた。……そして。

しかし、ナーエを殺さずとも、ナベリウスの象徴、あるいは、国そのもの……。

蒼き竜、スキタリスの首も落とす。

そうすれば、あの骸骨達は喜ぶだろう。

墓守達の祖先はナベリウスの支配を望んでいる。……馬鹿馬鹿しい。

彼らの戦争に付き合うつもりなんて無い。

歪んだ愛国心の塊なのは、どちらも同じなんじゃないのか？

ひっくり返したもので、墓守がナベリウスを差別する、という立場もあり得た歴史なんじゃないのだろうか？

何故、ナーエは自分に鎧をくれたのだろうか？

彼女自身、それを言葉に出来るのだろうか？ 何故、騎士にしてくれた？

分からない。

分からないから、考えたくなる。

自分は、考えてしまうから、所謂、一般的な墓守としてのメンタリティを有する事が出来なくなったのかもしれない。

終わりの無い憎悪の連鎖を望んでいるのは、一体、誰なのだろう。少なくとも、自分ではないし、ナーエでもない筈だ。グロッタには理解が出来ない、愛国心も、民族意識も、差別も何もかも……。自分は自分でしかないのだから。

何故、人は民族や属性、立場に固執するのだろうか？

.....。

ナーエと和解したい。

シンプルな理由だった。

そして、自分の中にも、移民への差別感情が根付いている。それも正しかった。墓守達に対する帰属意識も無い。誰もが平和で平等な世界が訪れるとは毛ほども思わない。

十

ナーエは、夜の中、自分がとてもこの時間に似つかわしい事に自嘲する。

ロタンは異国から来て、この国を壊した。

それが、ナベリウスを完全におかしくした。

もし、多くの血が流れたとしても、この国を愛するならば、殺戮も覚悟しなければならない。そこに善も悪も存在しないと思う。剣を振るう事の意味、その重みなのだから思う。剣は命の重みと、それを奪う事の意味、守る事の意味を教えてくれる。

剣を持つという事は、とても重い。

他の、あらゆる武器にも言えるだろう。

きっと、それは権力を行使する、という事でもあるのだろう。

民主主義は、民衆自体が理解出来ないから。

だから、自分が民衆の為に、血を流すしかないのだ。

守るべき者の為には、犠牲が必要なのだ。

ナベリウスが植民地になってはならない。

絶対に、譲歩してはならないものがあるのだ。

墓守くらいならいい。.....ナベリウス自体が許容してきたのだから。

けれども、移民だけは赦すわけにはいかない。

移民を守る者達も同罪だった。彼らは、この国を植民地化する者達の手先であり、この国の文化の破壊者達だ。邪教をばらまき、みなを混乱させ、無秩序を作る。

殺す事の意味.....。

命を奪う事の意味.....。

竜の神の代弁者として、その地位の重さを理解しなければならない。

殺す事。

始末する事。

たとえ、どれだけ色々なものを失ったとしても、それは仕方が無いのだろう。ある意味で言えば、それは独裁と呼ぶべきものなのかもしれない。けれども、構わない。

善も悪も、移り変わり、勝手に決められるものなのだから。

自分は聖女なのか、魔女なのか。

その定義に、きっと、意味は無いのだろう。

「私は聖なる存在なんだ。邪魔する奴らは首を落としてやる」

処刑人、きっと、今の自分は、そのような立場にいるのだろう。

そう、行使しなければならないのだ。

ロタンが現れる前にも、異教徒達は、粗暴にも、教会の中を壊して、市民を殺した。水源である湖に毒や汚物を流し込んだりもした。

この街の教会を、畑を、牛や豚を、何よりも国民の安全を守らなければならない。きっと、異教徒達が増え続ければ、いずれ、この国の歴史も文化も信仰も、消滅するだろう。蒼き竜をも、異教徒達は殺そうとするだろう。

それだけは、決して為されてはならない。

ナベリウスの歴史を振り返れば、異教徒が入り込んで、国民が凶悪犯罪に晒されてきた。守りたいものを守る為になら、敵対する者に情けをかけてはならない……。

十

つまり、どちらも正義……、あるいは、信仰の為に戦っているのだ。そこに、善悪などあるのだろうか？

グロッタは、決断する事にした。

一度、ナーエと戦うつもりだった。

最初に会った場所に向かうべきだった。

十

移民、異教徒、彼らはあらゆる場所に浸透している。

彼らだけの住宅街も作られ始めていると聞く。

いつから、この国は隙だらけになってしまったのだろう。

特に、彼らが偶像を作っているのだけは、ナーエは我慢がならなかった。

月と太陽。流れ去っていく。

この国は、一体、どうなっていくのだろうか。

十

おそらくは、どちらも、相手を理解しようとするつもりなんて無い。

言葉や思想は錯綜し、同じ価値を共有する事が出来ない。

十

「どうされますか？」

ナーエはかしずきながら、冰雪竜、ブルー・ドラゴン・スキタリスに訊ねる。

「お前にも、もう少し力が必要なのだろう。神鳴る剣を掲げなさい」

クリスタルのような氷が、周辺に生え出してくる。

ナーエが掲げた剣に、光の筋が走っていく。

「もし、可能ならば、私の力そのものと接続出来るようにしようか」

スキタリスは提案する。

「そんな、私ごときに……っ！」

自分の不甲斐無さを恥じる。

冰雪竜は、少しの間、沈黙していた。

「とにかく、彼らは始末します。我らの祖国の為に。生きる価値の無い者達を祖国に踏み入れるべきではありません。彼らは残らず、一掃するつもりです」

「左様か。……確かに、精一杯に動いて貰いたい。お主がこの国の未来を創る者なのだからな」

「勿体無いお言葉です」

ナーエは、嬉しそうな顔をした。

十

「私達の国は他の国を植民地化ないし、半植民地化した事もある。決して汚れなき国ではない。けれども、異教徒の奴らは我々の国の資源を食い潰していく。それが人権派を自称する奴らには分からないんだ。私達は国家を守る為に、国民を守る為に、他民族に同情するべきではない。何故、分からないのか不思議なんだ」

書斎だった。

ナベリウスに関する法律書、歴史書を漁りながら、ナーエは苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

彼女は嫌悪しながら、政治家達の顔を見ていた。

特に、他国との交渉を行っている経済大臣達と、その部下達は気に入らない。

もし必要ならば、彼らの首も、親衛隊達の手によって落とすしかない。

自分が、どんな非難を浴びようとも、それは仕方が無い事だった。

蒼き竜スキタリスは、あくまでも、この国の存続を願っている。そして、彼は異教徒に関しては嫌悪するが、その処遇に対しては、ナーエに任せている。

彼女は考え続けていた。

迷い続けてもいた。

絶滅させる為の施設を作るべきか、それとも、強制的に国から排除するべきか。どちらが正しい事なのかを、彼女は考えていた。

「エサル……、私はお前よりも信仰心が厚いつもりだが、どうしても、手を血に染める事が出来ない。効率的に絶滅する為の施設も考えていたが、やはり、他の国に帰って貰うか、別の国に行き行って貰うのが無難だろうな」

「何を言われるんですか……………」

エサルは、少し戸惑っていた。

「彼らは害虫です。不法滞在に対しての罰を与えるべきです。それは公開処刑が相応しいと思います。彼らに残虐な死を与えるべきだ」

この少年の言葉には、何の迷いも無いみたいだった。

「暴政を強いる覚悟はしてきたが。……エサル、国民が認めるだろうか？」

「僕はむしろ、それをするべきだと。ナーエさま、先に非礼を詫びます。お言葉ですが、貴方様は迷っておられる。僕ならば”害虫は殺せ”以外の選択はありませぬ、イナゴが穀物を貪れば民が飢えるように、僕は奴らを駆除しなければならぬと考えています」

「そうか、お前に迷いは無いのか」

「ええ」

エサルの瞳は、おそらく、正義、という感情に燃え上がっていた。

ナーエは……、少しだけ、憔悴していた。

十

既に、二人の間で溝が生まれつつあった。

政策に、決定的な違いが出始めている。

内容は、似ているようでいて、まるで違ったものだった。

エサルにとって、主人であるナーエでさえ、穏健派、人権派に思えて仕方が無かった。そして、ほんの少しだけ、彼はナーエを憎んでいた。いつだって、手を血に染めるのは自分だった。移民、汚らしい異教徒、異文化の者達を見る度に、殺害してきた。

……面白くない。

グロッタという男が、彼女を迷わせているのだろう。

エサルはそう考えていた。

そう思うと、呪詛の念ばかりが湧き上がってくる。

だが、心の底に押し隠す事にした。

『ナベリウスの職業と紋章』

ナベリウスには、職業別に、それぞれ象徴とされる動物がいる。

たとえば、騎士の場合は、コブラである。甲冑の何処かにコブラの紋章が入れられる。

工匠は狼、豊富は牛、商人は海蛇、聖職者は白鳥といったように紋章が与えられている。

だが。

墓守は侮蔑の意味を込めて、怪物であるキメラやナイトメア・ホースなどの、侮蔑的で、更に定まらない複数の紋章が与えられている。

1

「使いの者から手紙を貰ったよ」

「まさか、俺の呼び掛けにに応じて、本当に来るとは思わなかった」

塔の前だった。

「俺は決めたよ」

「何をだ？」

闇だ。

時刻は、日が開ける寸前だった。

「蒼き竜、スキタリスの首を落としてやる」

グロットは、剣を掲げて叫んだ。

「なあ？ ナーエ。翼の生えたトカゲをさっさと黙らせた後に、串焼きにして食べたら、すげえ、楽しいんだろうな！ 俺がそれがしたいんだ！」

彼は、露骨なまでの侮辱の言葉を吐き散らす。

ナーエは。

その顔が悪鬼のような形相になる。

「おい、お前、なんて言った？ 竜神さまの名を呼び捨てか？それから、何だ？ その後、お前、何を言った.....？ 貴様はナベリウスを何だと思っている？なあ、提案があるんだよ。車裂きにしてやろうか？ それとも火刑か？ ワニの穴にでも突き落してやろうか？ 恥辱的な刑にしてやる。お前の死体を晒しものにな」

挑発は彼女の心を揺らがせ、隙を多く作らせるどころか、激昂によって、彼女はかえって冷静に、そして速やかにグロットを殺害する意志を与えてしまったみたいだった。

ナーエの動きは早かった。

「そうだ、こうしよう。股の付け根から槍を通して、お前の喉から出す。死なないようにだ。その後、カラスなどに食べさせよう」

剣が交差する。

ナーエの剣の切っ先が、グロッタの首筋を裂いていく。首から血が流れる。

「俺は、先祖から力を託宣を貰った。墓守の竜神ア・ノモスは、この俺を祝福してくれた。……だが、俺は迷っている。……なあ、ナーエ。俺はお前に認められたいだけなんだ」

「黙れ。そして、お前は死の底に沈むんだ」

ナーエの剣の切っ先から、冷気が迸る。

雪の風が、グロッタの周りを覆っていく。

「何名の墓守を殺した？」

「……………？ さあ？ グロッタ、お前の事は知っている。お前が移民を何名か殺したのを知っている。どんな気分だった？ 異教徒を殺害する気分は」

「……俺の差別心からだろうよ。きっと、それは弱さなんだ。俺は移民、異教徒共にやっていく。墓守として……………この国はそうすべきだと思う」

グロッタの身体に、氷の刃が少しずつ張り付き、突き刺さっていく。

「そうか。差別か。そうかもしれない。けれども、私はナベリウスを優先する」

「どちらも、正義なんだろうな」

「残念だけど、そういう事ね」

「俺もお前を倒そうと思う……………」

剣が交差し、金属が鳴り合う音が響く。

彼の頭の中で、記憶が錯綜していく。

「『ペイル・ホース』」

グロッタは、短刀を取り出し、自らの手頸に傷を入れる。血が流れる。

……………、怖気が彼の背筋を過ぎ去った。

それは、グロッタの隣にいた。

まるで、彼の死を望んでいるかのように囁き掛けてくる。

それは、蒼白い馬だった。黒い影が馬の上に乗る、大きな鎌を手にしている。

いつか…………、彼の息の根を止めるであろう、死の馬…………。

「『ペイル・ホース・ブラッディ・ボルテックス』」

流れ出していく血が、渦巻き上のように、辺りへと回っていく。ナーエの生み出した雪の嵐を弾き飛ばしていく。

グロッタの振るった剣の斬撃が、そのまま帯のようになり、血の鞭を放っていく。ナーエは、それをあっさりと、剣により、弾き飛ばしていく。血の鞭は曲がり、蛇の頭のように、ナーエを襲おうとするが、そのまま氷漬けになって、しまいには砕け散る。

「『レトワール』」

ナーエが叫ぶ。彼女は剣を空に向かって掲げていた。

空高くに、稲光が飛び散っていく。

星の光が、グロッタへと降り注いでいく。彼は全身に傷を負っていく。

「……っ、……………」

「そのまま、孔だらけにしてやろうか？ 鉄の処女で処刑するように、血をたっぷり出させてや

るぞ？」

追撃が来た。

空から、氷と稲妻の弾丸が、流星のように降り注いでいく。

稲妻によって、グロッタの皮膚が焼け焦げていく。

「お前、生身だろ？ 電撃が人体に与える暴威は理解しているよな？」

彼女は優越的に笑った。

「そのまま心臓を止めてやる」

おそらくは、一度、何処かで全てを失った者の顔をしていた。

「『ブラッディ・ランス』」

血の槍が、ナーエに向かって、襲い掛かってくる。彼女はそれを弾き飛ばしたが、幾つかが身体の節々に命中していく。

霊体にどれだけのダメージが通るのかは分からない、だが、彼女が苦痛を感じているのは確かに分かった。

ナーエは剣の刃を、グロッタの首筋に張り付ける。

「……………っ！」

グロッタは全身に、電撃が走ったのを理解する炎で焼かれたように、火傷の痕が付けられていた。

「このままショック死するまでやってやろうと思ったんだけどな」

ナーエは、ナベリウスの偉大なる騎士が継承される剣、『神鳴る剣』を天空へ向かって突き上げる。

「もっと激しく、死の吹雪を奏でるぞっ！」

雷撃と雪風、そして血の嵐が辺り一帯に渦巻いていく。

「『レットワール・スォーム』」

それは、先程よりも、巨大な閃光だった。

空から、流星が降り注いでくる。

星が嵐となって、周囲一帯へと降り注いでいく、辺り一面が爆撃され、大きな孔が開いていく、塔は巧みに避けていたが、此処に来る途中の橋の近くに命中し、橋の大部分を削り取っていた。

「クソッ、加減が難しい……………」

彼女は、少し忌々しそうに言った。

グロッタは気付く。

小さなクレーターが、一帯に、広がっている。

あちらこちらが爆破炎上していたが、それらは不可思議な事に、やがて氷の山へと変わっていく。

グロッタは、ナーエが自身の力に怯んでいる隙を見逃さなかった。

再び、剣が交差する。

剣と剣が重なり合っていた。

「お前に俺の痛みが分かるか？」

「私にお前の痛みや苦しみなんて、理解するつもりも無いし、興味が無いんだよ。私はお前がゴミクズに見える。いいから、さっさと死ねよ。手を貸してやるから。お前が生きていてだけで、罪だし、何よりも目障りなんだ」

何度も、二人は剣を振るっていた。

お互いに、決定的なダメージを与えられずにいた。

刹那の時間が何度も続いたが、……やがて、数十分もの間、斬り合っていたのだろうか。

……………。

二人は、一呼吸置く。

互いに、傷だらけだった。

やがて、互いに剣を収める。

どちらも、酷く疲労していた。

どちらかと言えば、グロッタの方が、ダメージが深かった……。やはり、もう一步、ナーエには至らない……………。

全身が、凍傷と、感電による火傷だらけだ。

特に凍傷が酷かった。治療が遅ければ、壊死の危険性もある。

「……………、もうすぐ夜が明ける。人が集まってくる。……私はもう行く。なあ、グロッタ、今度こそお前を始末してやるよ。出来れば、酷い死を与えてやる……………」

「なあ、ナーエ。お前の考えを改めて聞きたいんだ。教えてくれ」

背を向ける女に対して、墓守の男は問い掛ける。

「私は先験的に“生きるに値しない命”があると思っている、お前とかはそれなんだ。どんなにお前らが不幸だったとしても、私はお前らが苦しんで死ぬべきだと考えている」

「……………、それが、お前にとっての、国を愛する心なんだな？」

「そうだ。国民は生きる価値があるが、お前は国民じゃない。だから、お前は死ぬべきだ」
少しだけ。

少しだけ、彼女は何かの嘘を付いているように、彼は思った。

それが、何なのかは分からない。

「分かるか？ グロッタ。この国には階級があるんだ。お前は生まれ付いて、差別され、地べたを這いずらなければならない星の下の生まれなんだ。そういう道理なんだよ」

「お前の信じる守りたい歴史ってのは、そういうものなのか？」

「ああ、そうだ」

彼女は迷う事なく断じる。

「それが国家全体の為だからな。悪いとは思いますが、お前ら墓守は二等市民で、私からすれば、ゴミだ。移民は責任を持って、死ぬべき害虫なんだよ」

少しだけ、彼女は自己の言葉に酔いしれるように言う。

いや、……誤魔化すかのように言っている。

「なら、そんなもの……………」

滅ぼしてやりたい……、と言おうと思い、それが出なかった。剣で殺めた者が後ろで囁いているようだった。結局の処、自分自身も移民、異教徒に対する、得体の知れない嫌悪感、誰かを選別したいという思考が何処かで存在しているのだ。

「私はドラゴンの代弁者だ。お前はこれからどうする？」

まるで、グロッタの心の底を覗き見るように、彼女は問い掛けてきた。

「私は、異民族受け入れの政策を行った経済大臣のゼパティルと話し合うつもりだ。これからは、移民は受け入れ拒否を行わせる。つまり、今後、入ってくるのは、不法移民というわけだ。不法移民の結末は二つしかない」

「……………、お前って奴は……………」

「強制送還か。処刑かのどちらかだ。つまり、そういう政策にする。……お前は墓守だから、分からないかもしれない、いや、きっと絶対に分からないだろうが、私は純血なナベリウス国民だ。お前は違う。だから、言葉が通じないんだよ」

「なあ、ナーエ。お前にも、墓守や異民族の血が混ざっているかもしれないぜ？」

「……そうかもしれない。でもな、重要なのは“宗教”なんだよ。つまり、それは神話だな、物語だ。つまり、大きな嘘みたいなものだ。倫理観や道德概念、国家の法律ってのは、そういう大きな嘘によって、作らないといけないんだ。私はそれを遂行しているだけだ。なあ、私の話は難しいか？ 反論したくなるか？ それとも、言っている言葉自体、意味がまるで分からないのか？」

グロッタは……、分からない、と、強い激情に襲われた。

「一つだけ、弁解したい事がある」

「何だ？」

「私は移民の処刑には携わった。だが、お前達、墓守は差別や軽蔑こそしてきたが、殺していない……。お前が先程言った“何名の墓守を殺した？”という問いだが、……私は墓守は殺していない。移民は殺したけどね……」

「どう言う意味だ……？」

「酒場での襲撃の件以来だったな。墓守が襲撃されているのは。それに関しては、……次、会った時に伝える。私にはやる事がある……、それが終わるまでに、お前が良からぬ行動を起こさぬようにな……」

「意味が、全然、分からねえよ……」

彼は納得出来ずにいた。

……………。

残夜だった。

太陽がもうじき、昇っていく。

傷だらけで、決して浅くない部位もあり、激痛が走るが、そんな中でも、この景色を美しいと感じる。みな、美しいと思うのではないのか？

グロッタはそのまま倒れる。

血もかなり失った。自分の力は自分自身の命を削るのだ。

このまま気絶してしまうかもしれない。……いや、傷を放置しておけば、最悪、死に至るかもしれない。何度も、死神が通り過ぎて、自らを連れ去ろうとする。それが具体的なヴィジョンとなって姿を現す事も多い。

2

『墓守』達の間でも、二つの派閥が出来つつあった。

それは、痛みを共有する移民達と、共生し、国を一つにするべきか。それとも、墓守達をナベリウスの一等市民にする為に、移民達に生贄になって貰うかだ。

直言すると、墓守達の多くも、やってくる移民達を奴隷にしたがっているという事だ。被差別民族というよりも、奴隷だ。

これから先も、様々な派閥が出来ていくだろう。

移民、異教徒を受け入れた事によって、これ程までに、この国の住民達の間には、亀裂が走ると、経済大臣は予測出来なかったのだ。

墓守、移民、ナベリウスの純血種。

彼らは、どうすれば共存出来るのだろうか？

みな、余りにも考え方が違い過ぎる

そもそも、墓守の間でさえ、同胞への差別と軽蔑が横行していたのだから。

そうやっている間にも、この国は、何度も力のある者に乗っ取られそうになった。歴史を紐解いて見てもそうなのだ。この国は愛国を掲げる事によって、国が存続してきた、そして、大量虐殺の歴史とも重なる。

十

移民がやってくるという事は、他国においては、戦争の火種や飢餓が蔓延しているという事だ。ナベリウスは、強力な国家にならないといけない。

その為に、氷雪竜、スキタリスの力が必要なのだ。

そうでなければ、この国は他国から侵略されるだろう。それは分かっている。各国の宰相が、マトモな交渉に応じるとも思えない。

けれども。

グロッタは、共存を望んでいた。

古き者達は、ナベリウス国民の血を欲している。しかし、彼はかつての世代の者達とは違う。自分は墓守という種族意識も捨てるつもりでいた。

たとえ、愛するナーエに理解されなかったとしても、自分は成し遂げるべきだと考えていた。この血は呪いだ。死の運び手だ。

自分の能力、『ペイル・ホース』はスティグマなのだ。

「すまんな、お前は殺す事に決めた」

彼女は鞘から、剣を引き抜く。

ナーエの剣は冷たく光る。

その瞳には、何の容赦も無かった。

「あ、貴方はナーエ殿……？ 魔導士ロタンとの戦いで命を落としたと聞かされていたが……………」

「もう分かるだろ？ 私は幽霊だ。お前の枕元に立ちに来たんだ。分かるだろ？」

ナーエの顔は蒼白で、本当に、生きている人間の顔をしていなかった。その瞳は、冷氣さえ帯び、その唇は、死人のそれを思わせた。

未だ、この男、経済大臣ゼパティルは、状況を把握していないみたいだった。

既に、国王とは話をしている、自分の存在を知って貰っている……。だが、同時に、国王には、自分の存在は大臣達に黙って貰う事にした。

この国の民主主義の弊害だ……。

国王が頻繁に、飾りになり、大臣達が暴利を貪る行為に及んでいく。

「何故、移民を入れる事を国王……コンスティル八世さまに許可させた」

「わたしは、わたくしは、四つある隣国と共闘すべきだと考えているのです。我々は隣国との条約なしでは、動けません」

ナーエは鼻を鳴らす。

「奴らは、大砲と呼ばれるものを持っている！ 武器の規模が我々とはケタ違いだ。山一つを消し飛ばしかねない程の力を持つ、未知の力を有しているのですぞ！」

ゼパティルは、必死で弁解する。

彼は、露骨に他国の軍事産業を恐れているみたいだった。

ナーエは、それにまるで聞く耳を持たなかった。

「我々は軍事産業を剣や弓矢に頼り、盾に頼り、槍に頼り、自然とドラゴンの力である、魔法に頼った。この意味が分かるか？ 奴らアホどもは、その大砲に頼って、大きな爆弾を作り、国家を焦土に変えた。我々が剣と魔法に頼るのは、我々の文明が遅れているからじゃあない。“高度な技術に頼れば、国家が自壊する”というドラゴンの教えからだ。高度な文明を適応して良いのは、教育や福祉や医療などだ。武器は駄目だ」

「貴方は奴らの武器を知らない、あの銃器というものを……戦車を……」

ナーエは、思わず、吹き出しそうになった。

「そんなもの、知っているに決まっているだろ、能無しが。国民には言うなよ！ 技術を持ち込むつもりは無い。脅威とも思っていない。魔法という万物の力を使え。……なあ、経済大臣、お前にとっては、脅威のモンスターかもしれないが、奴らはそんな武器で自国を滅ぼしていく、愚かな事だよ」

経済大臣ゼパティルは、彼女の反応が、とても意外みたいだった。

「愚かなお前に教えてやろう」

彼女は、中年男の喉に、剣の鞘を押し付ける。

「我らがドラゴン、スキタリスさまは、たとえ、核という物質により作られた巨大な爆弾による砲撃でも、此処に到達する前に、冷凍出来る程の力を有している。もし、それらの武器が攻め入ってきた場合、冷気の吐息で反撃するとおっしゃっておられる。そして、我らが兵達に、反撃出来る程の魔力を与えともな」

ナーエは、鞘を離す。

ゼパティルは、せき込んでいた。

「私は騎士だ。我らの民が使うべきものは、剣であり、槍であり、弓だ。お前、他国の武器商人どもとも、交渉を結んでいるな？」

「おっしゃっている事が、私はあくまで移民、難民、異教徒の移住許可を……………」

「移民だけじゃない。お前、ばかだろ？ 他国の有利になるように、交渉を進めたな？ 数年後くらいだろうか？ 我が国は、この他国の植民地になる。我々の祖先は奴隷になるんだよ。お前がエージェントをよこして、そういう規約を結んだな？」

「おっしゃる事が分かりませぬ……」

「直言するぞ。お前は売国をしたんだよ」

ナーエは、経済大臣のゼパティルの首筋に剣を置く。

「貴様が作った規約書を読んだぞ」

ナーエは、怨念を込めた瞳で経済大臣を凝視していた。

「我らの今後の農業の再生による豊穡を、土地を、乳産業を、牛達を、他国に売りさばき、代わりに銃器や爆弾などという野蛮な文明を取り入れようとしているな」

幽霊騎士は、剣の先端を床で何度も突いて鳴らす。

「契約は全て破棄させる」

「我らの未熟な軍事力と、魔法の力では、とても強国には……………」

「やかましい。もう喋るなっ！」

ナーエは、再び、ゼパティルの首筋に剣を置いた。男の首の皮膚は破れ、鮮血が流れ始めている。

「騎士が無法者、反逆者に対して、古より、首を落とすのが作法だ。分かるだろ？ お前の首は、公に晒す。それが伝統だ」

ゼパティルは、必死で弁解を続ける。

「わたくしは、貴方さまに負けず劣らず、ナベリウスの事を考えておるのです。此処の国はボロボロだ。ロタンのせいで、人口が減り、農業も、建築物も、医者も、そして、何よりも、我らを守る騎士、魔導士達も殺されましたっ！ もっと強い力が必要なのです、他国の協力も必要です！ 連携して、他国に領土を貸す事も思慮し、この国の発展を考えるべきなのです。そして、更なる軍事の発展が……………」

ナーエは、彼の話をもはや聞くつもりは無かった。

「幾ら貰った？ お前は良い地位を手に来る。この国を裏から支配出来るのか？ お前がまず

移民で、民族を補充しようとしなければ、こんな事にはならなかった。他国のゴミどもは我々の領土を狙っているんだよ。移民とセットで軍事を売り付けて、代わりに、我々の領土を欲しがっている。なあ、分かるだろ？ 何故、今のナベリウスは内戦へと向かっているかがな」

ナーエは剣を振るった。

「売国奴がっ！ ……………」

血が滴り落ちる。

「まあいいさ。私が新たにエージェントを送り、他国の者達と交渉させる。その際に、我々の国に不利な交渉を進めた国賊達の首を手土産にしてやろう」

彼女は剣から、布切れで鮮血を拭った。

「剣は銃器よりも強いんだよ。私は死後の世界で見ているんだ。核爆弾って奴が、文明を滅ぼした世界をな……………。幸い、この世界には自然の恩寵である魔法がある。不幸にも、魔法の無い世界だってある、だから、私は魔法と剣を選ぶ」

彼女は、物言わぬ屍を強く侮蔑した。

そして、彼女は、コンスティル八世の下へと赴いた。

「国王さま」

「何用だ？ 騎士よ？」

ナーエは、かしづく。

「私は貴方と、この国と、そして守り神にして象徴である竜神スキタリス様に忠誠を誓っております。しかし……」

「迷う事があるのか……。すまんのう、わしは毫碌しておって、マツリゴトは、大臣達に任せておる。そして、お主にも……」

「私は私の正しき事を行っているのです。私は正義でしょうか？ 悪でしょうか？」

国王は答えなかった。

ただ、ナーエの頭を優しく撫でた。

「わたしは、お主を孫のように思うておる。人は善にも悪にもなれる。そしてどちらが善か悪かは、わたしには分からぬ。わたしは民と、ナベリウスに仕えている。お主がどのような決断を下そうと、わたしはお主を咎めぬ」

「ありがとう御座います」

ナーエは目頭を押さえ、泣きそうな顔を押しさえる。

十

此処から、山を四つ程、超えた国があった。

そこは、百と数十年程前の戦争によって、疲弊して、他国からの移民を受け入れた。移民達は、かつてその国によって虐げられていた。その怨恨は消える事は無かった。

移民達は、労働組合を作り、革命組織を作り、その国の純血種達に次々と復讐していった。残

虐な処刑も行ったという。政権が弱っていた為に、ついにその国は、異国民、異文化によって略奪され、乗っ取られてしまった。

.....。

グロッタは、周辺の歴史も調べていた。

ナベリウスだけがそうではない。

何処の国も、陰惨な歴史の下に、成り立っている。

.....何故、こんなにも、国や血が、肌の色が、人種が、成り立ちだ、文化が違うだけで、これ程までに分かり合えないのだろうか？

みなで手を取り合って、共生、共存する事が出来ないのだろうか？

そんな事を言えば、夢物語だと嘲笑されるだろう。

答えが出ない。

言葉が違うからか？ 文化が違うからか？ 歴史が違うからか？

3

国の残酷な文化に則って、エサルは動いた。

彼は、それこそが、自分に与えられた役割であり、特権だとさえ思った。

街の中央付近にある公園にて、木で出来た晒し台が置かれていた。

そこには、墓守と移民の頭部が、雑然と並んでいた。

ナベリウスの文字と、古文字の両方で。

- 不純物どもを、皆殺しにしろ -

と、書かれていた。

隣には、この国の国旗が貼り付けられていた。

ナベリウスの国民達は、その光景を見て、熱狂的に、叫び声を上げていた。拍手喝采を送っている者もいた。だが、多くの者達は呆然とした顔で、それを眺めていた。

三百名程度が集まって、見ていたのだろうか。

誰かが、小声で、こんなのは、人のやる事ではない、と呟く。

それを聞いて。

他の誰かが“不純物を守ろうとする、反逆者か？”と叫んだ。

それから、次々と、小声で叫んだ者達につかみ掛かる者達が現れる。

「反逆者を殺せ！」

「血祭りにあげろ！ こいつもきっと異教徒だ！」

「そうだ、異教徒は俺達の領土を略奪しようとしているんだ！」

「我らの国を馬鹿にしやがって、あのムシケラどもがっ！」

過激な事を考えている者達の何名かが、その者を捕える。それは気弱そうな青年だった。彼

はあっという間に、過激な思想の者達に殴られていく。

「異教徒を殺せ！」

「そうだ、殺せ！」

彼は異様な程に、熱狂していた。

自分達が正義であり、自分達以外の者に正義を認めない、といった顔をしていた。

グロッタは、森が生い茂る場所で、その光景を見ていた。

.....ナーエ、これはお前が望んでいた事なのか？

この断絶を埋める術は、きっと、.....無いのだろう。

何人かの、布を被った者達が現れて、晒し台に置かれている首を取っていった。どうやら、彼らは異教徒なのだろう。大事そうに、同胞の首を握り締めていた。

そんな彼らを恫喝すると、武器を手にした筋骨逞しいナベリウス国民達が、彼らを追おうとする。

グロッタは力を使う事にした。

「『レッド・グラス』」

グロッタは、剣を軽く振るっていた。ペイル・ホースの派生能力だ。

これは、守る方の力だ。

血が、赤く、そして薄い壁となって、腕力に掲げるナベリウス国民へと覆い被さっていた。彼らは壁を殴り付けていき、拳を痛める。

手斧で、血の壁にヒビを入れて割った者もいた。

だが、すでに、逃げた異教徒は、何処かへと消え去っていた。

その後で、ナベリウス国民達は混乱していた。

「何をされたか分からねえ！」

「これ、血だぜえ。怪しげな力だ、奴らの顔を見たか？ ボンズル国の顔立ちだ。そっちからきた移民だよ。奴らの文化を俺は知っているぜ」

「どんなのだよ？」

「なんでも、死んだ仲間の肉を食べて供養するんだってさ。伝統的に飢餓が酷かった国らしいが、奴ら野蛮人は、仲間を喰ってまで生き延びようとするんだぜ。未開人だよ、本当に気持ちの悪い化け物達だ！」

「そうなのか？ 俺達ナベリウス国民は、たとえ貧しくて腹が減ってもそんな事はしねえ。やっぱり、奴らのような畜生どもを受け入れちゃいけねえんだ。怖ええよ、奴らは墓も暴くのかな？」

俺のじいさんは、この前、埋葬された。喰いに来るのか？」

「食屍鬼だ。人間じゃねえんだ。奴らは伝染病を運んでくるっても聞かぜ。俺達の国の医療でさえ、太刀打ち出来ない程に凶悪な奴だよ！」

「人の肉なんて喰うからだ、化け物だよ。人間じゃねえよ」

「奴らに喰われる前に殺すんだ、きっと、生きた人間も喰うに決まっている！」

「そうに違いねえ」

「そうだよ！ 奴らを追い出すしかねえんだ！」

「全員、やってきたら、斧や槍で応戦しようぜ！」

「ああ、そうしよう！ 奴らに喰われてたまるもんかよ！」

熱狂は熱狂を呼んでいく。

グロッタは人々の陰に隠れて、自分の力によって、ますます、ボンズル、という国の者達の肩身を狭くしたのではないのかと、複雑な気持ちに襲われた。

文化が相容れない……。

……………。

そう言えば、後から、知ったのだが。

シジールのリンゾ・トング国の者達は、貧しければ、窃盗も赦されると聞いた。つまり、そういう事なのだろう……。そう、彼らは信じる宗教、神……………、倫理観、道徳観念がまるで違った体系の中に生きているのだ。……………。更に、リンゾ・トングにおいては、娼婦を神聖化しており、ナベリウスでは絶対に赦されない、幼女売春を奨励している。更に、危険薬物を当たり前のものとして使っている。あらゆる文化が、この国とは違うのだ……。

十

『ペスト隔離室』

ナベリウスの北東を進むと、巨大な窪地があった。

大型馬車に乗せて、丸一日かけて、辿り着ける場所だった。

乳白の霧が漂っていた。

少しだけ、小雨も降っている。

騎士とその部下達は雨合羽を被り、ヘルズの民達には何も支給されていなかった。それは、騎士達に手を貸した者達も同じだ。

エサルは、ヘルズ・バーレーの何名かに、仲間達を誘導するように言った。それは、仲間を裏切れば、ワクチンを接種するように約束され、別の国への渡航が約束された者達だった。

今では、ナベリウスにおいて、ワクチンが開発されているが、それはかつて獐猛なまでに各国を蹂躪した病原菌だった。

既に、エサルにとっては、ナーエも、竜の言葉も関係が無かった。

彼は、熱心な信仰心の為に動き続けていた。

そして、自分こそが、一番、竜の代弁者なのだと信じて疑わなかった。国家存続の為になら、どんなに血が流れる事も厭わない。

ナーエでは、まだまだ優し過ぎる……。いや、甘過ぎると、彼は考え始めていた。

高い塀の奥に、ヘルズの住民達は入れられていく。

そして、塀を出入りする大きな扉は閉められた。

「おい、俺達をどうするつもりなんだろうな」

「マトモに生かすつもりは無いが、此処で暮らせって事なのかな？」

ヘルズ・バーレーの者達は、雨に濡れながら、この辺りを眺めていた。

寂れた農村だった。

正確には、その跡地だ。

雨ざらし、あるいは雪や風によって晒されて、ボロボロの煉瓦作りの家が並んでいた。ただ、少なくとも、今回、此処に来た二千名もの、ヘルズ・バーレーの移民達が生活するには、充分過ぎる程の広さがあった。

塀の外では、兵隊の一人が大声で彼らに向かって怒鳴るように話す。

「今日から貴様らには、此処で生活して貰う。農畜、衣服、その他、お前達で好きなように工面しろ。我々はそれ以上、お前達に干渉しない。ただし、此処を脱走し、ナベリウスに近付いた者達は容赦無く処刑し、焼却処分するように決めている」

兵士の一人が彼らに高々と告げた。

おそらくは、これからも、少しずつ、あるいは大量に、人が送られてくるのだろう。

塀の外には、弓兵達が、交代で陣取っているみたいだった。

聞く処によると、彼らの給料は普通の兵の倍近らしい。

それくらいに、……リスクを伴う仕事だからなのだ、と……。

ヘルズの民達は、掛けられた手枷、足枷などは、農村にあるものでどうにか、破壊しろ、と言われた。長い旅だったので、兵隊達に抗う気力も、彼らは失っていた。

しばらくして、若い青年が、廃屋を漁っていた。

彼は真っ先に、自らに掛けられている枷を全て破壊出来た者だった。彼は酷い飢えに苦しみながらも、この場所で自然栽培されている、と言われている果物をかじり取る。ナシ科の植物が生っていた。それから、小川もあり、魚も浮かんでいる。

どうやら、先に送られてきた、ヘルズ・バーレーの民の死体はその辺りに転がっていた。強い腐敗臭がする。

彼は息を飲む。

そして、仲間の死体を漁った、人肉食は覚悟していたが、聞く処によると、ナベリウスの聖典の中において、それらをもっともタブーなるものの一つであるらしい。自分達に対する慈悲というよりも、聖典への狂信から来るものなのだろう。……ありがたい事だった。

彼はその考えを振り切って、他に食べられるものがないか探した。

おそらく、小動物くらいはいるだろう。

青年は廃屋を探索していく。

ノコギリや金槌など、他の仲間達の枷を壊せそうな道具は充分に揃っていた。

青年は探索を続ける。

そして、心臓を高鳴らせていた。

此処には、確かに民家があり、人がいた形跡があった。

それも、最近、人が住んでいた形跡がだ。それもそうだ。自分達よりも、先にヘルズ・バーレーの者達が、此処に送られてきたのだから。

廃屋の中や、近くの林の中。

そこには、そこら辺に、あらゆる生命の死体が転がっていた。

猿やウサギ、それからよく分からない哺乳類の白骨死体が所々に転がっていた。中には、明らかに人骨と思われるものもあった。

死体ばかりだ……。

腐敗臭が酷い。

青年は二の腕に痒みを覚える。

どうやら、何匹かのノミに腕を噛まれたみたいだった。

十

何日か経過した後に……。

しばらくして、年老いた女の一人と、老人が発熱し、一週間足らずで死んでいった。

全身の所々に、赤い斑点が出来ていた。

彼らは死後の世界を信じている。

苦しみが多ければ、死後に以前よりも価値の生を送れると信じている。そして、成功し、愛や富を得られるとも教えられていた。

状況は悲惨以外のなにものでもなかった。

次々に、病気に感染して、みな死んでいった。

辺りには、蠅が沢山、集まってきた。

十

「ペスト菌を保管している場所なんですよねぇ。我々ナベリウスにはワクチンが配られていますが。貴方達はそうでは無いでしょうか？ まあ、僕も念の為に、もう一度、注射をしてから、帰りますよ」

エサルは無邪気に笑っていた。

自然を使った絶滅収容所だ。

此処に、菌を封じ込めて、国民は近寄らないようにしている。ナベリウス人はペストを克服するワクチンは開発したが、未だ、この辺りの区域では猛威を振るい、やってきた動物達を殺戮していた。

エサルは、その場所を、天然の処刑場にしようと考えていた。

エサルの中には、ナーエよりも、深く暗い狂気が芽生え続けていた。

彼は純血の原理主義者であり、墓守達も殺害するつもりでいた。また、可能ならば、墓守と関係を結んで生まれた、ハーフやクォーターなどの抹殺も望んでいた。

理想的な社会を構想しよう。

彼の中には、ひたむきな理想社会のヴィジョンが描かれていた。

「ナベリウス万歳っ！」

彼は思わず、声高に叫んでいた。

そして、彼の周囲にいた部下達も、自然とその言葉が口に出ていた。

「ナベリウス万歳っ！」

彼は自らの言葉に、恍惚としていた。

「売国者ども、共生主義者どもを抹殺しろ。僕がこの手で殺してやる、ああ、殺してやるぞっ！」

彼は純粹故に、間違っていた。

彼の熱狂は、周りの部下達にも伝わっていく。

彼の兵士達に混ざって、ヘルズ・バーレーの同胞を裏切った移民の一人が、彼に問うた。初老に近い男だった。彼は武器が無いが、兵士達によって身体検査をされていたので、エサルは特に何も思わなかった。

「あのう、エサル様、貴方様は我々の民族をどうお考えなのですか……………」

憔悴し切って、今にも卒倒しそうになっていた。

「墓守が牛や豚だとすれば。そうだね。君達は、衛生害虫なんだよ。台所に入り込んできて、穀物を食い荒らす虫けら。それが我々、国民が一般的な常識になって欲しいと僕が信じている。でもさ、僕は命は大切だって思っているから、たとえ害虫でも、畑の麦を食い荒らしたり、台所に入ってハムやチーズを横取りしなければ、生きていても良いって思っているよ」

二番目の竜の騎士は、満面の笑顔で、移民の男に述べた。

「この国はどんな国よりも、最高だよ。経済も福祉もしっかりとしていた。君達が憧れるのもよく分かる。でもだからといって、人の国に寄生するのは良くない。やっぱり、自分達の国を一番、素晴らしくしていかないといけないと思うんだ。ねえ、せつかく、君は生きる事が赦されたんだ。他の国に行って、頑張りなよ。なんなら、帰国する為の船を出してもいい。ああ、君、ワクチンはまだ一本、打っておきなよ。僕はヒューマニストだから、義理は守りたいんだ。君がムシケラ達を騙してくれたおかげで、沢山の殺処分が出来るんだからね」

エサルと話をする初老の男は、かつて、ヘルズ・バーレーにおいて、市長の一人をやっていた。彼はみなを指導する者達の一人だった。人々の声援と、選挙によって選ばれて、みなから感謝されて生きてきた。……苦しい事は多かったし、他国によって土を破壊された、彼自身も難民にならざるを得なかった……。

エサルは、鼻を押さえる。

「ねえ、それにしても、君、凄い臭いんだよね。その肌の色も発音も嫌いなんだよ。二度と、僕達の大地に脚を踏み入れて欲しくないなあ」

「そうですか」

初老の男はもう、何も言わなかった。

エサルは、兵士達の苦勞をねぎらっていた。

兵士達は、オレンジを手にしながら、それでキャッチ・ボールをしていた。

彼らはとても、のどかに笑い合っていた。エールを飲んでいる者達もいた。ジョッキ同士が当たる音がする。

エサルに問い掛けた移民の男は、故郷のオレンジの味を思い出す。仲間達と酒を飲んで、笑

い合っていた日々が懐かしい……。

男は、大地に突っ伏して、涙を流し続ける。

兵士達は、彼の事を何も気に留めず、一仕事付いた後の、休憩を楽しんでいたのだった。夜には、キャンプ・ファイヤーを行うみたいだ。

……………。

エサルに問い掛けたその男は、異国の地へと赴く船を待たずに、その日の夜に、同胞達への謝罪の文字を何ページにも渡って書き記した遺書を残して、静かに首をくくった……。

十

グロッタは、人種関係なく、人間を一人の人間として見たい、と考え始めていた。

そもそも、人間に属性などあるのだろうか？

けれども、墓守側も、自分達の属性に囚われてしまっている。

『ナベリウス』であるナーエにも、『墓守』であるア・ノモス達と墓守の先祖達、墓守の霊達の側にも付かない。

それが、人類全体としての成長なのではないか？

理想はきっと、脆く壊れるだろう。

けれども、自分だけは曲げない。自分だけはこの信念を揺るがせないつもりでいた。

清らかでありたい……。

多分、人間らしく、だとか、善人でありたいとか、正義を持ちたいとか、そういった言葉で説明出来ない何かだ。きっと、それが自分が在りたいものだ。

ナーエと再び、会う必要があった。

それから、正直、自分はこの国がどうなったって関係が無いとさえ考え始めていた。それには、未来に孤絶が待っているだろう。

どの勢力の意思も、納得がいかなかった。

本音の部分では、みな、いがみ合いたがっている。

みな、自分達の利益を優先している。

きっと、自分も何かしらの目的を持って生きていて、それは正しい事ではないのかもしれない。

何で、自分は生まれてきたのだろうか？

シンプルな理由だった。

自分には、この世界の理が分からない。

自分自身が、何者なのかさえも分からないのかもしれない、一体、この世界の仕組みが何なのか、何によって動かされているのか、どのような力学が世界を支配しているのか。人間とはそもそも何者なのか、文化や人種、あるいは人類の根底にあるものとは、一体、何なのか？ 何もかも分からない、伝達不可能な言葉を投げ合っている感覚だ。

みな、通じない言葉同士の下で生きている。

世界なんて、何も理解していやしないのに……。

ただ、漠然と、彼は思ったのは……。

人は生まれる土地も、肌の色も、性質も、文化も、家庭も、才能でさえも選ぶ事が出来ない。
どうしようもない、不条理さが、無慈悲さが、この世界を支配している。

十

エサルは、墓守とのクォーターだった。

自分は純血民族では無い。

その劣等感が、彼の根底にはあった。

墓守も、移民も殺し続ければ、自分が純血になれるような気がした……。

『ドラゴンの騎士』

非常時にて、氷雪竜スキタリスの代弁者となった竜の騎士は、通常の騎士とはまるで別格の役職であり、国王や大臣達は彼、彼女、もしくは彼らに最高権力を一時的に譲り渡さなければならない。更に、竜の騎士は、国王以上に法律を自由に行使し、恣意的に、曲解する事が出来る。

1

「移民、そして異教徒どものみの問題に絞るだけで、最低な事態になっているのよ」

そこは、騎士達の訓練所だった。

彼女は、彼らを問い詰めるべく、一斉に集めたのだった。

「なあ、お前達が画策した貿易のせいで、国民の補充員として、各国からの難民、つまり異教徒どもを入れたわけだが、どうなったか分かっているんだろうな？」

ナーエは、経済大臣であるゼパティルの首を床に投げ捨てて、彼らに向かって告げた。

幽霊騎士である、ナーエの姿は、ゼパティルの配下達、一党達にとっては、とても恐ろしく映った。まさしく、冥府からの死神そのものだった。

一党達は、跪き、一心に、彼女の赦しを乞おうとしていた。

「まず、リンゾ・トング国の者どもは、死体に群がるウジ虫のようだ。奴らは違法薬物を、我々、ナベリウス国民に売りさばいて、何とも思っていない。既に、治療師達の手が追い付かない。発狂して、精神の隔離病棟に担ぎ込まれて、鎖で拘束せざるを得ない者達が増え続けている。脳の大部分が壊れているから、治療のメドが立たない。それに奴らの戒律の中には、よく知られている通り、貧しき場合、他者から奪ってもいいとされている。歪な共同体社会が生んだおかしな法律らしいな」

彼女は、剥き出しの刀身で石の床を叩いていく。

よく金属の音は響いた。

「お、お言葉ですが。騎士さま。彼らは農民、建築作業員として、よき働きを行っております。破壊された聖堂の復旧も、十四、五にも上りました。人々の信仰心も戻りつつあります」

「それを差し引いても、罪が重過ぎるのよ。ポンズルの難民は最悪だ。奴らはまさに、我らの竜の教え、つまり最も重き秩序に反している。ポンズルのゴミどもは、人喰い民族だ。それに、一親等の近親相姦を奨励している人類のカスだ。未開人の、蛮族だ。あの民族の言語の中には、和姦と強姦の区別も付いていやしない。それくらいに文明レベルが低過ぎる、奴らのせいで、ナベリウス女性からの強姦被害が増えている。緊急避妊薬を配らなければならない状況になっている。裁判員達は夜も眠れずにいる。新しく、監獄を設立しなければならない。奴らに適用する為に、去勢刑の執行も考えている」

幽霊騎士は、経済大臣の部下の一人一人の頬に、冷たい鋼の剣で撫でていく。今にも、一人一人の首を斬り落としていきそうな形相だった。

「おい、お前、名前は？」

「わ、わたくしですか？ スティリア・ボルティッチと申します……」

「……ステーキ？ ……ボルシチ？ 料理の名前みたいだし、それに長いな。おい、我らの竜の神、スキタリスさまの誓約の三条を説明してみろ、この、海藻みたいな前髪ハゲ」

スティリアは、思わず、自らのとても薄くなった前髪に触れようとする。

ナーエは、眼で恫喝していた。

「食人、近親姦は大重罪で、死罪にあたと……………」

「その通りだ。そのスポンジみたいな頭でも、記憶していたみたいだな」

彼女は金属の剣で、床を叩き続ける。

「国民が奴らの愚行を何度も眼にしている。この前も、聖堂の修復の際に、誤って事故死した者を食べようとした。奴らにとっては、弔いなんだろうが。我々にとっては、蛮行だ。あんなイカれた文化を国民に浸透させるわけにはいかない」

経済大臣の部下の一人が、それを聞き、口元を押さえる。

「悪い事は他にもある。ポンズルは民間信仰を支持している。魔法使いでもなく、治癒師でもなく、薬剤師でもない癖に、病気の治療を行おうとする。身体の一部を切り取る事によって、癌のような大病が治ると考えている連中だ。奴らの祈祷は本当に見えて不快だ。公園で火を焚きながら、鬱病患者の脚を切り落として、精神病を治そうとしていたんだぞ！」

「……………、返す言葉も御座いません……………」

「アレを放置していたら、奴らは今度は何をしたと思う？ ナベリウス国の薬剤師や料理人から、職を奪おうとしたんだ。自分達で店を出してな、意味が分かるな？」

ナーエは、口元を押さえる。

彼女自身、本当に吐き気を堪えているみたいだった。

「お前達が、共生と共存を望んだ結果が、これだ。……人肉ハンバーグを街頭で売るわ、安い値段の治療と称して、手足や指の切断で治療とするわ……………、最悪だ」

「さ、さすがに、ハンバーグの方は、都市伝説かと……………、彼らはあくまで死者の鎮魂の為に、人の肉を食べて……………」

「奴らの宗教はこうだ。同胞の死を、より多くの者達の血肉になって欲しい。奴らの慣習なんだよ。この国に来ても直らない。そういう民族性なんだから」

彼女は呆れ声になった後、この場にいる者達を一通り、睨む。

ナーエは指を鳴らす。

すると、処刑人の仮面を被った者達が現れて、経済大臣の部下達の腕をつかんでいく。

竜の騎士には、何の迷いも無かった。

「お前達は全員、死罪だ。我が国とドラゴンに背いた罪だ。よって、『コブラの処刑』を取り行う」

「ひ、ひいいい、お赦しをっ！」

「お慈悲をっ！」

「き、騎士殿っ！ 余りにも、それは暴政ではないか！？ 我らに弁解の場をっ！」

遠くから、まるで心理的な追撃を入れるかのように、激しいピアノの音が鳴り響いてきた。狂想曲のようであり、悲想曲のようでもある。

丁度、夕食の時間なのだ。

宮廷にいる演奏家達が、貴族達を楽しませる為に、ピアノを鳴らしているのだ。更に、音色は激しくなっていく。

次々と。

処刑人達によって、経済大臣の配下達は、奥の部屋へと引きずられていく。

「お前達も知っての通り、我らの国においては、コブラは聖なる生き物、ドラゴンの化身だ。騎士の紋章でもある。お前達は、コブラの血肉になれ。お前達は清められる。お前達は政治犯の大罪人としてではなく、聖なる霊として、この国に祀られるのだ。人々から軽蔑ではなく、崇敬の眼で後の世にて見られるだろうな。少しは、私の慈悲に感謝して欲しいものだ」

ナーエは鼻を鳴らした。

……………。

しばらくして、阿鼻叫喚の音が、奥の部屋にて響き渡っていた。

部屋の奥には、コブラ達の住まう孔があり、次々と突き落とされていったのだろう。

ピアノの音が、止んでいく。

おそらく、演奏家を替えている最中なのだろう。次は、明るく軽快なメロディーが流れる筈だ。

宮廷にいる者達は、みな、存分に夕食を楽しんでいるのだろう。

「さて、エサルは何を考えている……？ 奴が行き過ぎないようにしなければ。……竜の神に助言を求めないと……………」

彼女は、剣を鞘に納めると、いつものように、ドラゴンの塔へと向かう事にした。

十

「ナーエ、お主を私に代わり、最高権力者に任命する。お主が正統な竜の騎士としての務めを果たすのだぞ。国王よりも重い使命だ」

コンスティル八世は、かしづくナーエに向かって、そう告げた。

彼女は、ゼパティルを処刑する前に、国王からそのような使命を承っていた。彼女は、今後は、ある程度の暴力によって、この国を統治するつもりでいた。

異教徒は基本的には、絶対的な敵だ。

根絶するべき病巣だ。

民を守る為に、血は流されなければならない。

殺すべき命と、守るべき命を選び取らなければならない。全ての命が平等だという思考こそ、病気を蔓延させるのだ。

それはきっと、覚悟の問題なのだ。

彼女は力を行使する事に決めた。

何が正気で何が狂気なのか。

何が善で何が悪なのか。

ボロボロになってしまった、この国は今、例外的な状態なのだ。ならば、その異常事態の中においては、異常こそが正常になる。

結局、この世界に必要なのは、力なのだから。

力が無ければ何も守れないのだから。

十

「人間は上手くいかぬものだな」

氷雪竜スキタリスは、塔の中で石柱に巻き付きながら、尻尾を震わせて、ナーエを見下ろしていた。

「私は数百年前に、この国を創設して以来、リベラルな制度と民主主義を掲げて、国民同士での統治を望んでいたのだが。度々、この国には独裁者が現れるようになった」

「私もそうなる覚悟で御座います.....」

「ロタンを始末しなかったのは、私の方が謝らなければならないだろう。誓約を破棄してでも、私の方から、動き、奴を始末するべきだった」

「滅相も御座いません」

「おそらく、歴史においては、二度目.....あるいは、二百と六十年程前の戦争以来か、この国が他国によって侵略され、植民地化されそうになった時があった。戦争の終結と共に、多くの者達が死んだ。彼らが私に力を望んだのは、戦争の後期になってからの事だ。私はその時も、早期に私が動かねばならぬと考えていたが.....」

「誓約は絶対で御座います。他ならぬ貴方さまが曲げる必要は御座いません」

騎士は、剣の鞘を握り締め、目の前にいる者に忠誠を誓う事を示す。

「ナーエよ」

「はい」

「お前が望むならば、更なる力を授けよう。この塔の最奥に、騎士の剣を置いてある。それはお前に、私と同等の力を行使する事が可能になるだろう」

ナーエは息を飲む。

「スキタリスさまと同等の.....？」

「左様。その剣は、私自体を媒介にして、力が繋がっている。つまり、私自体の生命力をエネルギーにして、力を振るう事になる」

十

エサルの行動は、既にナーエの意思さえも超えてしまっている。

あるいは、彼女が心の中で望んでいて、歯止めをきかせていた事を、彼は純粹故にやってしま

ったのかもしれない。彼は正しいと思って、大量虐殺、民族浄化を執行しようとしているのだ。

2

「俺達を助けてくれたんだな」

布を頭から、すっぽり被った者達が、グロッタに声を掛けてくれた。

ポンズルの民達だ。

彼らは、滑舌の悪いナベリウス語を使いながら、グロッタに礼を言う。

「その包み、晒し台にされた者達の頭だろ？ 食べるのか？」

ポンズルの民達の一人が、顔の布を取る。黄色い肌の男だった。

彼は全身を小刻みに震わせていた。

「最初は知らなかったんだ。『竜の戒律』ってのが、……それに、俺達は誇りを持っている。俺達はとても貧しい国だった。同胞の血肉は民族同士の血肉だった」

「悪いが、その文化は、この俺も理解出来ない。はっきり言うぜ。気持ち悪いんだよ。お前達の国の中だけでやってくれ。俺達の国ではダメだ。生理的に駄目なんだ。タブーだし、……人のやる事に思えないんだ。お前達を化け物や悪魔にしか見えないんだ」

グロッタは、強く、そして容赦無く言い放つ。

「ナベリウスの偏見に満ちた連中は、お前らを無差別に人を殺して食う連中だって考えている奴らも多いんだぜ？ 俺はお前達の事を調べているし、こうやって、話をしている。だから、なんていうか“同じ人間”なんだって分かる。お前達には、お前達の宗教とか、人を愛する考えとかがあって、供養として、死んだ仲間の肉を食べる。……でも、その文化を俺達に持ち込むな。でなければ、出て行けよ。この国からな」

彼の言葉は辛辣だった。

その声音には、少しの怨嗟と同族嫌悪さえ含まれるものだった。

「なあ、あんた名前は？」

「俺の名はグロッタ。『墓守』だ。ナベリウスの、元奴隷階級の人種だ」

「そうか、俺はドッデル。俺の国は、侵略と内戦に巻き込まれている。俺達が崇める、神の像も破壊された。家屋も……」

「それで、此処に来たわけって事か。国家の荒廃で、国民全体が不足しているからな。低賃金労働者を欲してやがるからな」

グロッタは、気を利かせる事にした。

「一緒にナベリウスのパンを食べようぜ？ 本当に美味しい。これがナベリウスの誇りだ。それから、湖から汲まれる水で生成したワインを飲もう。もし、食人をこの国でしないのなら、俺はお前達を歓迎する。とにかく、この国に来たら、この国のルールを守れ。お前達の文化を持ち込むんじゃない。じゃなければ……、殺されると思え」

ドッデルは、とても嬉しそうだった。

ポンズルの者達は陽気だった。

少し堅苦しいヘルズ・バーレーや、陰鬱な感情を持った墓守や、小ずるそうなリンゾ・トング、リベラルだが排他的で戒律の厳しいナベリウスとはまるで違った感じがした。

グロッタは、パーティに参加する事になる。

彼らの食事は、豚にハーブを混ぜたものだった。言われている程に、未開人の文明という事も無い。

「おい、こいつが俺達を助けてくれたのさ」

ドッデルは、グロッタの背中を叩き続けた。

「なあ、ナベリウスの聖典を燃やしてやろうぜ」

「いい事だな」

酔っているとは言え、明らかにマズイ事が彼らの口から大声で叫ばれていた。

「俺達の領土は大国に攻められて、農業が牛耳られたんだよ」

「トウモロコシ畑を占領された」

「もう、どうしようもなくなって、此処に来る事になったんだよ！」

「此処で農作業が出来る。経済大臣には感謝しないとな」

彼らはエールの入ったジョッキを叩き合っていた。

小さな子供いた、女の子だ。

「彼女は？」

「トトルス、俺達の子だ」

でっぷりとした夫婦が笑い合っていた。二人共、顔が似ている。

「もしかして、お前達って」

「ああ、姉と弟さ」

グロッタは、余り、深く考えないようにした。

部屋の奥では、長老と呼ばれている老人が、上半身裸で、何かまじないをしていた。どうやら、何かを治療しているらしい。

「なあ、何やってるんだ……？」

グロッタは……。

それを見て、……どうしようもない、理解の外を感じていた。

それは、右足を失った者に、どうやら、死体から切り取った脚を縫い付けているみたいだった。更に、彼は別の場所にも、腐肉を縫い付けられているみたいだった。

「何をしていますんですか？」

グロッタは老人に訊ねた。

「治療をしておる。悪しき膿を出さねばならぬ。その為には、同胞の屍の力が必要なのだ」

「彼の脚、どうしたんですか？」

「彼は結核に侵されておるのじゃよ、それは脚に悪い霊が宿っておるからじゃ、その為に切除す

る事になった」

グロッタは……、結核は、ナベリウスで適切な治療が受けられる。結核などで死ぬ者など、この国には殆ど存在しない……。そう言おうと思ったが、止めにした。

患者は酷く苦しんでいた。

何故か、頬に針を入れられ、胸や腹をナイフで傷付けられていた。

彼は、何も見なかった事にして、宴に戻る事にする。

……、また後悔する事になった。

処刑された仲間達の頭蓋を開いて、ドッデルも含めた、ポンズルの者達が脳を食べていた。残った骨も砕いて、粉末にしている者もいた。……その光景はまるで、食屍鬼以外の何者でもなかった……。彼らはこの国の『竜の戒律』を守る気なんて、さらさら無いみただった……。

グロッタは……。

彼らに気付かれないように、樽の中へと激しく嘔吐していた。

もしかすると、先程食べた、豚肉と思ったものの中にも……、考えたくは無かった。

「なあ、俺は用事を思い出した。すぐに動かなければならないんだ……、また飲もう」

そう言うと、グロッタは、彼らに満面の笑みを浮かべる。

ポンズルの者達は、少し残念そうだが、笑顔だった。

……………。

争い、殺し合いこそしなかったが……。

おそらく、きっとそれは広い意味での裏切りなのだろう。

彼らの文化を受け入れる事は不可能だ。どうしようもない、断絶が、そこには開いている。彼らを傷付けないように、哀しませないように、グロッタは、ポンズル達の宴会を後にしたのだった……。

十

ポンズルの宴会から抜け出した後に、グロッタは、墓守の同胞達の下へと向かおうと思った。

一番、過激な思想を持っているのは、骨皮のように痩せた男のスラザーズだ。彼はレジスタンス運動と称した、国家テロを考えている。……間違いなく、多くの墓守達もテロリストと認定される恐れがある。

……俺が奴なら、『ア・ノモス』と過去の霊達から力を得る為に、冥府へと向かうだろうな。奴を探さなければ……………。

3

墓守達の集まる、居酒屋に入る。

少し、無防備だったかもしれない。

「よう、墓守の同胞」

口髭と顎髭を伸ばした、極端に痩せた顔の男が、グロッタの前に現れる。

たまに、酒の席で話をするので、知っている顔だ。

「俺はナベリウスの騎士達を暗殺する事にした。我らがドラゴン、『ア・ノモス』さまは、俺に力をくださった」

彼は両手を広げる、彼の両手からは、紫色のエネルギーが溢れ出していた。

「俺はお前も、ナーエも止めるつもりだ……………」

「お前は何がしたい？」

スラザーズは訊ねる。

「移民を殺害したかと思えば、別の国からの移民を助けた。墓守と移民を弾圧し、虐殺さえ念頭に入れている、ナベリウスの騎士とも交流を持っている。お前はどっちだ？ なあ、お前は誰からも信用されていやしない。殺すか殺されるか、もうその選択しか無いんだよ」

グロッタは、境界線の中にいる。

橋渡しが出来ないか、と、彼は考え続けている。

「なあ、お前ら、待てよ、ナーエに確認したぜ。奴は墓守の人権は確保し、移民は虐殺ではなく、追放を考えているそうだ。もし、移民犯罪、文化破壊を、ナベリウスの宗教侮辱、彼らの宗教を広めさえしなければ、共存も考えているそうだ。なあ、俺は交渉するよ、みんなの間に立てると思っている……………」

彼は嘘を付いた。

沢山の嘘を付いた。大きな嘘を付いた。

……………、それが嘘とバレる程に、彼は……………。

スラザーズは、彼の表情を読み取っているみたいだった。

「俺は人喰い人種と、泥棒どもを、切り込み隊長にして、宮廷を襲わせる。威張り腐った、貴族どもの首をはねて、農民達の畑を略奪して、聖堂に火を付けるつもりだ。お前は、墓守が差別された歴史を理解していない、お前こそ、墓守の裏切り者だ」

「……………、お前……………、お前、何を言っているのか分かっているのか……………？」

それは、墓守による純然たる異国民への差別だ。

「俺が救世主になる。お前は罪人だ」

思わず。

グロッタは、剣を抜いていた。

そして、刀身を強く握り、滑らせて、血をまき散らしていく。

しゅううううう、と。

血の渦が、周辺に取り囲んでいく。

「俺に触れるなよ？ 触れたら、刻んでやる」

二人の間で、緊張が走った。

「威勢がいいが。お前が裏切り者である、っていう認識は、どうも俺だけじゃあねえようだぜえ？」

周りに墓守の者達が集まってきた。

中には、グロッタとよく顔見知りの者や、友人までいた。

グロッタは、仲間の墓守達に囲まれる。

「え、おい？ ジュタル、ゼールシュ。なあ、どうしたんだよ？ 友人だろ？」

グロッタと同年代の青年が、スラザーズの隣に並ぶ。

「なあ、あの日の惨劇から、もう決定的な亀裂が起こったんだよ。奴らの騎士の一人が、俺達の仲間を氷漬けにして殺した。その中に俺の父親も混ざっていた。分からねえんだろ？ まだ、お前はさっきみたいな事を言い続けるんだろ？」

ゼールシュは涙を流していた。

「殺してやる。俺はあの騎士を殺してやる。俺はお前の親友だったから知っている。お前には惚れていた女がいた。そいつは、今、ナベリウスの最高権力者をやっている……っ！」

更に、彼はグロッタを罵倒し続けていた。

グロッタの耳には、親友の言葉が入ってこなかった。

グロッタは覚悟と……、諦めを決めた……。

ナーエが好きだった。

もはや、恋愛感情を超えた……、一人の人間として……。

「俺の『血の領域』に入ったら、纏めて刻んでやる。俺はもう決めたから……」

「やはり、裏切り者か……」

スラザーズは、座った眼をしていた。

その瞳は、どんよりと濁っていた。

「この俺は、俺達は墓守のドラゴン『ア・ノモス』さまから、御力を貰った、それをお前にも使ってやろう」

痩せこけた男は笑い続けていた。

「『開放』させろ。我が力『モンクス・フード』」

回転する、血渦の刃を喰い潜って、何者かがグロッタの領域へと侵入してきた。そいつは、半透明な大きな顔だった。醜いミイラにも見えた。死体にも見えた。幽霊なのだろうか。

気付くと、グロッタの左肩の甲冑が剥ぎ取られていた。

どうやら、攻撃を受けてしまったみたいだった。肩から夥しい出血をしている。

更に、追撃として、グロッタの両脚に、顔が触れていた。

グロッタは、ひたすらに、スラザーズの姿ばかりを眼で覆っていた。彼は何も攻撃を見せる素振りが無かった。

墓守の騎士は、両脚を負傷して、立てずにいた。しかし、苦悶の声を上げながらも告げる。

「おい、俺に血を流させたら、俺の力はより強大になる。段々、俺の能力がどういう力なのか、分かってきているんだろう……？」

「ああ、分かっているぜ」

スラザーズはとても楽しそうだった。

「お前がいくら、自らの血で俺を攻撃しようが。まるで関係が無い」

グロッタは気付いた。

周りに集まっている者達全員の眼が輝いていた。

彼らは、手に黒に近い茶色のオーラのようなものを纏っていた。

「うおおおおっ！！！！ 『ペイル・ホース、レッド・グラス』ッ！！！！」

グロッタは叫ぶ。

血の壁が、グラスを逆さにしたように、グロッタを包み込む。だが……。

その壁をすり抜けて、半透明な怪物は、グロッタの胸元を体当たりをしてきた。

「その薄汚れた鎧をブチ壊してやる。お前がどうしても、奴ら側の人間だと現しているようにしか見えねえんだよ」

気付けば。

グロッタの作り出した、血は、長い槍状になって、スラザーズの胸元を貫通させていた。

やせ細った男は、血を吐きながら、地面に倒れる。

「やったな。………、ついに俺を殺したな。もう、この位置は致命傷だ。俺は覚悟していた、お前と同じくらいにな」

彼は勝利の笑みを浮かべていた。

グロッタは、即座に意味が分かった。

周辺に集まっていたのは、敵意の眼差しを向ける、墓守の仲間達だった。彼らは、なおも、両腕から、禍々しい色の気体を発しながら、彼を呪詛の眼で睨んでいた。

墓守達との交渉が、完全に決裂してしまった事だけは理解が出来た。

それも。

……最悪の形でだ……。

グロッタは、即座に、居酒屋の窓をこじ開けて、外へと飛び出した。

グロッタは逃げながら、考え始める。

仮説かもしれない。

おそらく、彼の能力は、自分と同胞の者達が“彼と同じ力を使える能力”なのだろう。彼の死自体には、おそらくは問題が無い。死後も、その力は残り続けるのだ。そして、それは伝染、あるいは感染していく能力なんじゃないのか……？

もしそうだとするならば。

………、かなり凄惨な自体になるだろう。

ナベリウスからの、墓守への粛清は、徹底したものになりかねない……。

十

今は誰が敵で、誰が味方なのだ？

どの勢力も敵に回してしまっているんじゃないのか？

自分の優柔不断さに自己嫌悪が過ぎる。

だが、……何もかも、決断し続けるのは良い事なのか？

工匠の家だった。

大きな家だ。この工匠は、専用の武具を作り、直す、貴族階級の工匠なのだ。紋章を見て、すぐに分かった。

彼は窓を壊して、中へと忍び込む。

中は、一般的な、ナベリウス国民の中流家庭の所有する家具が並んでいる。

「おい、無礼者、お前、何者だ？」

グロッタは、床へと倒れる。

この家の主である工匠は、グロッタの服装を見て、すぐに腰を低くする。

「……騎士の鎧。申し訳ありませんでした……。鎧は、騎士の命。わたくしめが、即座に直して差し上げます。それから、今から治癒師を探してきます」

「なあ、もう一つ頼めないか？」

グロッタは、鍛冶屋に告げる。

「なんでも言って下さいっ！」

「ナーエに、……騎士団長に手紙を送りたいんだ……、俺の大切な友人だ」

十

「スパイ、御苦労」

「結果として、そうなったんだよ……」

夜空の下だ。

王宮の最上階から見える、ナベリウスの景色は、とても綺麗だった。自然が美しい。そして、各地区で修繕された大聖堂は、月夜において、厳かな輝きを放っていた。

その街の美しさに、グロッタは暗澹とした気分になる。

この民族達の気持ちが、分かるような気がしてくるからだ。

「結局、お前は何をしたんだ？」

胸下にある、上腹部周辺のコブラの紋章を叩きながら、ナーエは訊ねる。

「何をしたかった……じゃねえのかよ……」

グロッタは、自らの鞘を強く握り締めていた。

「今なら、私はお前を簡単に殺せる自信がある。スキタリスさまから、更なる力を授けられたからな」

「もういいよ。……止めようぜ……。俺は墓守の守護者、ア・ノモスと決裂した。……そして、墓守達とも……、何故、俺達は共に生きられない……？」

ナーエは、答えなかった。

彼女に聞く耳を持たせる事は、出来ないのだろう。

「エサルの動向がおかしい……、墓守達を襲撃したのは奴だ。私の命令では無い」

「……、お前は関与していないんだな？」

「誓って言う。関与していない。その件に関しては、本当に悪かったと思っている」

「……、もう遅いよ……。俺はもう、裏切り者だ……」

彼は、悲想と絶無に押し潰されそうにながら、告げる。

ナーエは感情を露にしない。

「私は今や最高権力者だ。その権限によって、お前は墓守では無い。私がそう述べるのだから、そうなる。お前は我らがナベリウスの正式な騎士に任命する」

同胞達にとっての、完全なる裏切りだった……。

もう、後戻りなど、出来る筈が無い……。

どちらにも、生きれないのだ。

「それで、スラザーズ的能力に付いては話した。奴に同調していた、墓守達も、同じ力を使っていた……。どう思う？」

「全員が同じ能力を使えた、と、いうのも考えたが。何かおかしいわね。能力自体が、もう一人歩きしているんじゃないかしら？ 最初に、スラザーズが彼らに同じ力を与えていった。その後、彼らは集団で貴方を始末しようとした……」

「つまり、どういう事だ？」

「多分、その能力は“伝染する”んじゃないかしら？ おそらく、発動条件は、私達、ナベリウスに強い恨みを持っているのが条件。おそらく、怨念を実体化させて、攻撃してきているのだと思うわね」

「だとすれば……」

「犠牲者が相当に、増える事になるわね。双方共に……」

「なあ、もしだ。もし、その能力が……、墓守限定ではなく、異民族にも適用出来るものだとすれば……」

「血は、更に流れる事になるわ」

彼女の言葉は、何処までも冷たかった。

暗に何を示唆しているのか、グロッタは理解する。

彼は奈落の底に、落とされたような気分になる。

……。

だが。

ふと、ナーエは、首を傾げていた。

「……それ程、強い能力なのかしら？ 力を“伝染”させているんじゃなくて、“貸している”状態という可能性もあるわね」

グロッタは、推理に、見落としている点に気付いた。

「確かに……、本当の使い手はスラザーズじゃなくて……」

「そうね。だとすれば、貴方にとって、ラッキーな事じゃないかしら？ 墓守全体に力を感染させる事が出来ないのであれば、墓守からの脅威は事実上、留置される事になるから」

「根拠は……？」

ナーエは、少し苦々しそうに答えた。

その話は、グロッタにとっては、首を傾げるような内容だった。

「……。それが根拠だ。何度も言わせないでよ」

「おい、もし、だ。お前の今、言ったのは、お前が信じたいだけの事じゃないのか？ もし、もしも、墓守のア・ノモスが、ナベリウスのスキタリスよりも、強大だった場合……」

ナーエが。

憎悪に満ちた眼で、グロッタを睨んでいた。

グロッタは、寒気が走り、これ以上の言葉を止めた。

「とにかく、俺は、やるだけやってみる……」

彼の鞆は、彼の手汗で湿っていた。

「どちらにせよ、私もやるべき事をやる。貴方も、それを決めるべきね」

彼女は、顎に指を置く。

「ああ、そうだ」

ナーエは告げる。

「今から、スキタリスさまの元に行こう。お前には適職だと思う。あの方も、最初、物陰で見えていたお前には好意を持ってくださっていた」

「……………？ どういう事だ……？」

「喜べ、グロッタ。お前は、迎えられたんだ。どんなに辛くなっても……、お前はな、グロッタ。スキタリスさまが任命してくださるそうだ。お前は三人目のドラゴンの騎士だ。ナベリウスのな。これからは、スキタリスさまに忠誠を誓うんだ」

ナーエは、彼に、ドラゴンの塔に向かうように告げた。

十

結果としては……。

スラザーズに加担していた、同胞の墓守達は皆殺しにする事になった。

グロッタは、もう完全に引き返せない事が分かった。

自分はどちら側なのだ……？

十

まず、ひっくり返されるように、ナベリウスの農民達の溜まり場が襲撃された。沢山のナベリウス国民達の死体が転がっていた。

次はおそらくは、聖堂か工匠達のギルドだろう、とナーエは告げた。

彼女は、最悪、彼らは国民達を、残虐に公開処刑するつもりだろう、とも述べた。

「俺はどうすればいいと思う……？」

「私は今は、あえて放置する。泳がせる。……罪が発覚次第、監獄に入れて、尋問し、……後は分かるな？」

それは、酷く残酷な計画のように思えた。

グロッタを追い詰めるには、充分過ぎる程の計画だった……。

「何でだよ、早く動けよ！ お前は墓守を嫌悪していただろうっ！」

「他の移民達の犯罪を取り締まり、監視し、処分するのに、十分な兵を割いている。分からないか？ もはや、墓守達は脅威では無いんだっ！」

ナーエの言葉は、相変わらず酷薄に満ちていた。

そして、強く焦ってさえいた。

「させねえよ。お前の魂胆が分かったからな。お前は……、墓守を“差別的な弾圧”としてではなくて“正当な刑罰”として、始末するつもりだろう？ そうだろ？」

ナーエは、しばらくの間、黙示していた。

しばらくして、口を開く。

「エサルからは証拠が見つからない。……まあ、黒でしょうけど。エサルはもう、私の言葉を聞かないでしょうね。選択するのは、貴方。意味が分かるわよね？」

少しだけ、……意外な言葉だった。

彼女は、戸惑っているように思えた。

グロッタは、思考が整理出来ずにいた。

「やってやるよ……、ああ、やってやるっ！」

グロッタは、涙を流していた。

何の為に泣いているのだろうか？

もはや、ありとあらゆる激情が、胸を何度も掻き毟っている。

そう。

これからやる事は、同胞の処刑だ。

罪を広げない為に……。

ナーエは気付いている。

墓守達の暴動が、更にこれまで不満があり、テロに参加していない者達の参加も煽る事になるだろうと。そうすれば、テロに走る墓守達は多くなるだろう。

その前に、スラザーズの作った残党達を始末しなければならない。

自分の考えが正しければ、力は伝染するだろうから。

……俺は、何故、血に塗れる運命なんだ……？

そう、血だ。

民族としての血。何もかもが、この国では、運命を決定させている。

「お前の性格の悪さには、ホトホト、愛想が尽きたよっ！」

「……分かって欲しいのよ。人員を割けない。貴方に対する悪意からじゃない。私にも責任がある。優先順位がある。今は、移民の方が脅威なのよ……」

「お前は、お前のお仲間の始末もするんだよな？」

「必要なら、そうする」

「分かったよ」

グロッタは、ナーエを睨み付ける。

「俺が両手を血に染めてやる。みな殺してやる。お前にとって都合の悪い奴らをだ。それが、一

人でも多くの奴らを助けられる、って妄信しながらなっ！」

血の騎士はそう言うと、部屋の扉を勢いよく閉めた。

いっそ、狂った方が、どれだけ楽なのだろう？

十

手掛かりは少ない。

墓守の居住地に向かう最中だった。ナベリウスの農民達の組合は、兵士達がいる、困惑した顔をしていた。

グロッタは、何とかして、事件があった場所に入れて貰うように頼んでいた。ナーエの事を持ち出そうと思っていた。

後ろから、肩を叩かれる。

「お前は……？」

ポンズルの者だった。少し前に、宴会にいた者だ。

「グロッタさん。情報があります。探しているんでしょう？」

「何だ？」

「後を付けたんです。俺の仲間が。奴らの一人が、今度は14管区の聖堂を明日、夜に襲うと計画しているみたいです。聖歌があるらしいですからね」

「ありがとう。恩に着る」

十

聖堂の中で待っていた。

聖歌隊と聖職者が、竜の聖句を読んでいた。

何事もなく、静かに終わり、パンとワインが配られていく。

そのまま、一時間が過ぎる。

グロッタは、情報違いか、と思っていた。

だが。

参列した者の中に、いつの間にか、墓守の顔をした者が紛れ込んでいる事に気付いた。どうやら、化粧で誤魔化していたみたいだった。

彼は、両手から、骸骨の顔をした、エネルギー体と飛ばしていく。

まず、燭台が破壊された。

辺りが暗闇に染まる。

グロッタは迷わなかった。

一気に距離を詰め、墓守の顔を確認すると、その者の胸を剣によって貫通させる。肋骨を砕き、心臓を射抜く感触が腕に伝わる。

スタンドグラスが割れていき、全身をローブで覆った墓守達が中に入り込んでいき、次々と、

聖歌隊達を襲撃していく。

.....能力の使い手は、お前が先日殺したスラザーズでは無い可能性がある。多分、他の奴が能力者だ。そして、他の者達に、能力を貸す事が出来るんだ。私はそう見ている。墓守全員に伝染するように、力を贈与出来るとは考えていない。根拠は、.....私の主人であるスキタリスさまが、そのような事が出来ないから言っているんだが.....。

グロッタも、その意見には、賛同したい。

ナーエの推理によれば、そいつを殺せば、この攻撃を止めさせる事が出来ると思う。

だが、彼女の意見は、彼女自身の希望的観測、あるいは自分の民族の象徴の絶対的な優越感から来るものもあった。.....彼女は、ナベリウスのスキタリスよりも、墓守のア・ノモスが強大な力を有している、と考えたくも無いのだろう。

だが、今回は、その希望の方に縋りたい。

グロッタは、マッチで、持っていた蠟燭に、火を付けた。

半透明な透過する骸骨達は、次々と、参拝者達を喰い破り、殺していく。聖職者の頭が無くなった。

ナイフを持ったローブの男達が、次々と、参拝者達を刺殺していく。

グロッタは力を使う。

「『ブラッディ・ボルテックス』」

血の渦が刃となり、ローブの男達の腕を切り裂いていく。

ローブのフードが弾け、グロッタのかつての親友であるジュタルの顔が露になる。

「グロッタッ！」

彼は驚いているみたいだった。

腕の傷は深そうだった。彼は地面に倒れ、蹲っていた。

「こ、この、この裏切り者がっ！」

「すまない、俺は.....」

背後にて、彼へと、半透明の骸骨の砲弾を放ってきた男がいた。グロッタは跳躍する。そして、剣を掲げる。剣の切っ先からは、血の槍が伸びて、背後の男の胸を貫いていた。

フードが取れる。

「ゼールシュ.....」

彼も、かつての親友だった。

十代の頃の墓作りのバイト仲間でもあった。よく冗談を言い合った.....。

血が花が咲くように飛び散る。

ゼールシュは即死していた。

.....、グロッタの親友は、地面に崩れ落ちる前に死んでいた。

「なあおい、グロッタ.....。お前は何で、俺達ではなく、ナベリウス側に付いたんだ.....？ 俺はいつでも待っていたのに.....、スラザーズは計画者だったけど、スラザーズを殺したお前を.....、俺は同胞を説得して、迎え入れるつもりだった.....なのに.....」

「ジュタル、.....、ごめんな。本当に、ごめん」

「何が、ごめん、だよ……」

かつての親友は、腕を押さえていた。傷が深い。……障害が残るかもしれない。

「俺は今は、竜の騎士なんだ。ナベリウスの、三番目のドラゴンの騎士なんだ。墓守の騎士じゃないんだ」

二人の間で、悲愴的な空気が流れる。

「そうか……」

ジュタルは泣いていた。

襲撃はいつの間にか、止んでいた。

ジュタルは、衛兵によって連れていかれる。

グロッタは、呆然自失のまま、そこに佇んでいた。

「終わらせたいんだろっ！ 俺達に力を貸しているのは、ヴォールデウスだっ！ いつもひねくられていて、頑固親父の墓番の長だっ！ そうだ、あのクズ野郎だっ！ そいつの首を刎ねれば、俺達、墓守の反逆は終わるっ！」

そう言うと、ジュタルは気を失う。どうやら、やりとりを理解出来ずにいた衛兵に腹を殴られたみたいだった。

グロッタは、再び、呆然としながら、生き残った者達が悲鳴を上げるのを聞いていた。

彼の言葉を聞く限り、ナーエの推理は当たっていたみたいだった。

それに、少しだけ、安堵する。

……、ア・ノモスから与えられた能力が、感染し、墓守の中から同じ能力者が増え続けるのならば、今のナーエならば、無差別に、墓守達を虐殺する事を決断するだろう。

それが、免れた、という事だ。

そして、更に、良い知らせはあった。

「ジュタル……。そして、ナーエ。俺は最悪な境遇だが、今、少しだけドラゴンに感謝している。あの下劣なクソ親父が仕掛け人だと？ 良い知らせだ。ラッキーだ。奴を始末すれば、他の大切な同胞達を、もう殺さなくて済むんだな？ 奴は大切ではないからな」

グロッタは、心なしか、鼻歌を歌っていた。

そして、同時に、親友を殺めた事によって、胸を掻き毟られそうになっていた。

十

もっとも、楽な殺し方は、背後からの一突きだった。

楽はさせてやらない為に、少しだけ急所をズラしてやった。

作りかけの墓石が並んでいた。

この男は、墓地の取り締まりと、墓石の管理の両方を行っていた。いつも威張り散らしていた為に、グロッタ自身、いつか、ぶん殴ってやろうかと思っていた。……こんな形で、復讐する事になるとは思わなかった。

暖炉の火が揺れる。

ヴォールデュスは、口髭に掛かる程に血を吐いていた。

未だ、生きていた。

そして、力を使い始めた。

グロッタの周囲に、無数の悪霊の顔が集まってくる。今にも、彼の頭を、胸を、腕を、腹を、脚を、食い千切ろうとしていた。

「俺と刺し違えるか……？」

グロッタは、冷酷に告げる。

「何故、墓守を裏切った……………」

中年の男は、グロッタに訊ねる。

「墓守の同胞が大切だから。お前達の方が間違っている。この化け物どもが俺の血肉を貪るより先に、お前の首を落とす。……俺はな、クソ親父、お前から随分、殴られ罵倒されたな、ガキの頃から。お前、アル中だもんな。昔、俺とゼールシュのバイト代の半分を、いつもピンハネしてくれたな？ ……ああ、もうちょっと待てよ。もうちょっと、生きてくれよ？」

グロッタは、剣を引き抜くと、ブラッディ・ボルテックスを使って、周囲に漂う化け物を攻撃し続ける。

そして、今度は、目の前にいる、でっぴりとアルコールによって、太った中年男性の腹と顔を強く蹴り付けていく。

「同胞が大切……？ てめえ、この小便臭え、すぐにゲロ吐く小僧……」

「誰が話していいって言った？」

グロッタは、全体重を中年男の口に押し付ける。銀製のブーツが、彼の歯を威勢よく砕いていく。

「おお、この機会を作ってくださった、ナベリウスの神、スキタリスさま、そして、この男に力を与えたア・ノモスさま、俺は今、貴方達に感謝しております。良いストーリーに導いてくださいましたね。この男に罰を与える機会を下さって」

グロッタは、聖職者の話し方の真似をしながら、呪詛の言葉を嫌みたっぷりに、今、殺そうとしている男に述べていく。

中年男は、口から歯を落としながらも、なおも、グロッタを攻撃しようとしていた。

グロッタは、剣を振るい、男の両腕を深く斬り付ける。

この男には恨みがある……。

良い人間や悪い人間、好きな人間、嫌いな人間に、人種など関係が無い。

「お前さ、何年前だったかな？ 俺の妹分に手を出したの。ムリヤリだったんだってな。彼女はショックで自殺未遂をした。初めてを、奪った。てめえは、いつも墓守の中で仕切っていたなあ。お前のせいで、泣きを見た同胞は数多い。ホント、お前は墓守の顔潰しだった」

グロッタは、ブーツで何度も男を蹴り飛ばしていた。

そして、しばらくして、蹴り疲れた後に、喉の辺りに、刃を振るう。

事が終わると、グロッタは、疲労困憊しながら、壁にもたれる。

あらゆる血の匂いが、身体中にこびり付いていた。

……ナーエ、お前、変わってしまったのって。妹をロタンに殺されたからなのかな……？
俺も、残酷な部分が強いだな。俺とお前は、きっと似ているんだな……。
彼は気付けば、笑い声を上げていた。
隣で、死神が蹲っているのが分かった。
自分が残酷な気分になる時に、現れるのだ。
シジュールの時にも、現れた。蒼い色の死神。自分の力、ペイル・ホースはきっと、意志を持っている……。
いつか、こいつは自分を憑き殺すのだろう。
それも、きっと仕方の無い、運命なのだろう……。
たとえそれが、どんなに、辛い使命だったとしても……。
「ナーエの処に戻って、報告するか……。墓守に手厚くしろ、と……」

十

……。

本当は覚えている。
けれども、命運は違ってしまったのだから、もうどうしようもないのだ。
グロッタの事は覚えている。
木の事。
約束の事。
薄らぼんやりとしたものも、思い出していたきた。
もう十年以上は経過している……。
だから、どうしようもない、無くなってしまった過去なのだ。
不完全なものなのだけど。
彼にとっての価値と、自分にとっての価値は違った。
温度差とか、どうしようもない立場とか。
自分達が何者なのか、だとか。
グロッタは、きっと自分の死も、他人の死も無自覚で。
ただ、自らの血を背負って生きていくのだろう。
自身の記憶さえも改竄させなければならない。
思い出の中の”彼は死んだ”のだ。
今、現れた彼は自分の記憶の”幽霊”みたいなものだ。
だから、彼には価値は無い。
思い出は死ぬ。
人間の心は変わる……、今の自分は揺るがないから。
……。
ナーエは自らの剣の柄を握り締める。

余分な感情は排除すべきなのだろう。

それは今の自分には、何の意味も無い事なのだから.....。

『ナベリウスの聖典とドラゴンの誓約の一部抜粋。順不同。』

- ・ ナベリウスの民は、その創設者である竜、スキタリスの民である。
 - ・ 血統に誇りを持て。我々はどの民族よりも清く正しい。
 - ・ 湖は神聖なる領域であり、民の血そのものである。汚すなかれ。
 - ・ パン、麦は竜の肉であると思え。
 - ・ 竜を冒瀆する者達は死罪に値する。
 - ・ 大罪を犯していない場合、ナベリウス国民には最低の生活の保障を与えよ。
 - ・ 我らの国は、どのような国家、民族よりも優れていると知れ。
 - ・ 貴族と平民は同じ権利を有する。役職が違うだけで、そこに上下は無い。
 - ・ 飢えたる者を増やしてはならない。疫病を増やしてはならない。
 - ・ 国民であれば、女や子供、または性別に違和を感じる弱者を侮辱してはならぬ。
 - ・ 血統を侮辱する行為、食人や近親相姦を行う者は死罪と知れ。
 - ・ 自殺を望む者達の心を癒やし、彼らの言葉に耳を傾けろ。
 - ・ 休息日を称えよ。
 - ・ 金や富を崇拜してはならぬ。それは偶像であり、邪教であると知れ。
 - ・ 芸術や文化に触れる時間を養え。教養は力と知れ。
 - ・ 医療、福祉、教育の制度を発展させ、同時にこの国の自然を愛せ。
- ドラゴンの誓約のみに記載されている文章 -

- ・騎士は竜の代弁者である。騎士の代表は、竜の声だとする。※誓約のみに記載。
- ・竜の代弁者たる騎士は時として、国王よりも最高権力を行使する権利がある。※誓約のみに記載。
- ・歴史を作る上で、高度な科学技術を武器にしてはならぬ。それは自国を滅ぼす病巣となろう。※誓約のみに記載。
- 聖典の中にて、一部、削除された箇所 -。
- ・汝らは竜の従者であり、汝ら以外の民族は、汝らの従者であると知れ。

※聖典はスキタリスが作った文書である。数百年の間、後に何度か改竄もされる。ちなみに、正確には、数百ページに渡る長い文書である。法律の在り方、労働の在り方、福祉の在り方、聖堂への賛美、騎士の使命など、事細かな事が綿密に記されている。なお、歴史内において、恣意的に解釈されて、暴政を行う国王や騎士は何名か誕生した。なお、『聖典』と『竜の誓約』は、重複して条約が書かれている個所が散見されるが、竜の誓約には、竜の騎士にのみ行使出来る条約が記されている。

※聖典には、何処にも、ナベリウス国民「以外」の人権の事が書かれていない。

貴族と平民に、階級的な差異はそれ程無い。つまり、この国は他民族から収奪し、更なる下の階級を作る事によって、栄えてきた国である。

スキタリスの性格、本性がそこに反映されていると言える。

1

極寒の冬が近付いていた。

秋の収穫祭が終わり、みな、冬への支度を整えていた。

ナベリウスの冬はとても寒い。よく凍死者が出る。吹雪は恐るべき怪物だ。それに畏怖をなして、冷気を自在に使えるドラゴン、スキタリスを、この国の本当の支配者にしたのだろう。歴史は分からない。元々、ドラゴンが作った国なのか、それとも、国がドラゴンを支配者になるべく懇願したのか。あらゆる連綿とした循環の下、この国の歴史は続いてきた。

ただ、時折、行われる大粛清は、今日も容赦が無かった。

移民達は、巨大監獄によって収容されていく。

彼らのうち、まずは軽い重い問わない犯罪者だった。それから、重病人。身体的なもの、精神的なものを問わない障害者達。

今後は、子ども、老人、それから、特殊な性癖を持つ者達、更には移民を過剰に擁護する者

達も、この中に放り込まれるのだと聞かされている。

噂が噂を呼ぶ。

国民達は混乱していた。

誰が犠牲になるのか？

墓守達の立場は、かなりきわどいものだった。

彼らの大部分が、ナベリウスに跪き、これまで同様の権利と引き換えに、積極的に移民の殺害を望むようになった。政治的には、墓守は殺さない、という事になった。

墓守達は……、移民、異教徒に対する差別、弾圧を許容する方向へと向かった。

……………。

この国は、独裁者なき独裁国家なのだろうか。

国王コンスティルも、氷雪竜スキタリスも、率先した動きも煽動も見せる事は無い。ただ、国民が望み、動いているように、グロッタは見えた。ナーエは手回ししているだろうが、あくまでも、彼女の力ではなく、国民自らが、このような状況を望んでいるようにしか見えなかった。

グロッタは、城から地上を眺めていた。

此処に来る途中、人々の心の荒廃ぶりを眼にしていた。彼らは口々に荒みながら、血の粛清の事ばかりを話していた。

途中見る事が出来る異国民達は、みな重労働を行って、今にも死にそうな顔をしている者も多かった。彼らはナベリウス国民、墓守達と違って、マトモな医療を受ける権利も、労働組合に入る権利も無いのだ。

「これはお前が望んだ事なのか？」

グロッタは、背後にいる者に訊ねる。気配で分かった。

「私は……、共生はしない。だが、殺害もしない事に決めていた。元いた国に、……悲惨だろうが、帰って貰うか、別の国に行って貰おうと考えていた。我々の文化は、移民と共生出来ない。少なくとも、私は血が混ざる事も、文化が混ざる事も望んでいない」

「こんな結末を望んでいたのかよ？ あれを見ろよ、灰の山だよ。過剰労働で死んだ者達を焼いた灰だよ」

グロッタは涙を流していた。

竜の騎士、ナーエは酷薄な顔をしていた。

「私は此処までするつもりは無かった。……」

彼女は、少し言い淀んでいるみたいだった。

「お前が招いた結果だぞ！」

「違う！」

彼女は剣呑な顔になる。

「私の部下である、エサルが。私と袂を分かった。その頃から、奴が新たに団体を立ち上げた。そこから、私の計画もおかしくなった」

彼女は、怒りと戸惑いの表情を見せていた。

「お前は止めなかったのかよ？」

物凄く、身勝手に感じた。

「私はナベリウスさえ守ればいい。その結果、お前らと、彼らがどうなるかが構わない。それに関しては、私は私の信念を曲げていない」

ナーエは、相変わらず、書類に目を通していた。

グロッタは、壁を殴り付ける。

異民族にだって、異教徒にだって、良い奴はいる。

それは確かだ。シジール……。

「なあ、人種や文化関係なく、良い奴も悪い奴も……」

「黙れ。そんな事は、この私も分かっている。けれどもな、グロッタ。これは強い感覚的なものなんだ。生理的嫌悪感みたいなものだ。空が緑でいけないように、澄んだ湖が真っ黒くてはならないように。私は彼らを何らかの形で始末しなければならないんだ」

「分からねえよ、俺には」

グロッタは、強く拳を握り締める。

「何で、みんな共存出来ないんだ？ 分からねえ」

「残念なんだけどな。グロッタ。私もそうなんだが。彼らの肌や喋り方、宗教観が嫌いだ。彼らは理解が出来ない存在なんだよ。いつ、我々が脅かされるか分からない。お前は墓守だ。被差別者だな。お前らだって、ナベリウス国民には少なからぬ、怨恨の感情を抱いている筈だろう？」

対話が出来ない、という事なのか。

グロッタは思わず、自らの剣の柄を握り締めていた。

「私を倒すつもりか？ もうこの政策は終わらないよ。それに、今度はお前に簡単に勝利する自信がある」

ナーエの顔は、氷のように冷め切っていた。

「それに、お前が私を殺す、という事は。ナベリウスの者達もみな、殺す、という覚悟があるんだろうな？ 墓守達の一部はそれを望んでいるだろう。……墓守達は、お前を受け入れてくれると思うか？」

返す言葉が、……何も無かった。

十

冬になった。

猛吹雪が吹き荒れる。

絶滅収容施設が使われて、移民の多くが、死んだ。

その数は、何十万にも及ぶのだろうか。

同胞の死体を処理するのも、彼らの仕事だった。

そして、収容施設や処刑によって殺された異民族達の一部は、各国へと死体を送り返されていた。他にも、大罪人としたゼパティルと、その部下達の骸は、経済交渉を行った政治家達の下へと送り届けられた。

他国を恐れさせるには、充分過ぎる程の牽制になるだろう……。

ナーエは他国の軍事牽制にも、備えるつもりでいた。

そして。

彼女は、露骨に各国と敵対するつもりでいた。

スキタリスの力があれば、もはや、この国を侵略する意思を持つ者達は減るだろう。徹底した暴力は、おそらく、敵のやる気を削ぐだろう。

暴政以外に、ナベリウスを守る術は無い。

血の剣士、グロッタの瞳は、くすんでいた。

自分には、この世界に抗う術が何も無い……。

「愛国の為には仕方が無いんだよ」

彼女は隣にいる、グロッタに告げる。

「ゼパティルの行った交渉条約は、我々の農業、畜産業にとって、不利なものばかりだった。他の国に、食糧自給の多くを任せる、といった形でな」

彼女の表情は読み取れない。

「我々には、ドラゴンがいる。奴らには無い。近代的な武器を使おうが、魔法使いや兵隊をいくら集めようが、もはや私達に侵略する事は出来ない。既に、エージェントを新たに任命して送っている」

「その件に関しては……、俺も正しいと思っている……」

ナーエは、かなり厳しく考えている。

もし、ナベリウス国民自身が墮落したとすれば、自国民を処刑する事さえも考えているみたいだった。法律の改正も考えているみたいだった。

もはや、グロッタには決して止められない。

彼は、彼女の為すべき事を、静観して見ている事にした。

そして、心の中で、殺した仲間の墓守達の顔を頻繁に思い出していた。最近、夢枕にも、親友達の顔が現れる。

「私は血も涙も無いか？」

「……そう見える」

「はっきり言うな。しかし、……他国の者達は、ヘルズ・バーレーの権力者達は、リンゾ・トンクの権力者達は、……一方的に略奪されているポンズルは、少し違うかもしれないが……。この二つの国家の権力者達はな。自国民を必要無いものとして、私達の国へと廃棄する事を考えていたんだよ。誰が悪だろうな？」

グロッタは塀に背もたれ、空を見上げた。

とてつもなく、澄んでいた。

「なあ、私は移民、異教徒達は、これ以上、殺したくない。……でも、エサルは違う。あいつは……、純粋なナベリウスの血を引いていないんだ……」

「どういう事だ……？」

「墓守の血が入っている。もし、私もそうならば、彼と似たような事をするだろう……、同族

嫌悪って奴だ。お前に使命を与えたいんだが、聞いてくれないか？」

「勝手な奴だな。俺はお前の為になら、何でもするぜ……」

「エサルを止めて欲しい。……私は、竜の騎士にするべき仲間を見誤ったのかもしれない……」

「お前が手を下せばいいだろう？ お前も責任を取れよ」

グロッタは、怨嗟を込めて言う。

「確かに……」

意外にも、ナーエは頷く。

……、違う、初めから、彼女はそうするつもりでいる。彼女は更に、冷酷な決断を下そうとしている。かつて自ら仲間に引き入れ、もう一人の竜の騎士にしたエサル。

「竜の騎士、エサルは何者かに、暗殺された、という筋を描こう。……全て、上手く行くと思う」

「……なあ、俺が悪かったよ、悪かった……」

グロッタは涙を流していた。

自分は、やはり、何処までも愚か者なのだ、と、この時に確信した。

「分かったよ、分かったから、俺が止める。でも、……どうなるかは分からない……」

「ありがとう……」

彼女は、泣きたいのか嬉しいのか、よく分からないような表情をしていた。

2

書斎だった。

騎士の鎧を脱いだ、未だそばかすの浮き出ている青年は、窓の雪を眺めていた。

そして、振り返る。

彼の瞳からは、未だ純朴さが消えていなかった。

それに対して、グロッタは強い戦慄を覚えた。

「ヘルズ・バーレーの移民に関しては、彼らの文化を尊重する事にしました」

ペスト菌の保管区域に、民族を大量に送ったエサルは、にこやかな顔で、目の前にいる、紅い甲冑の騎士に告げた。

「彼らは転生を信じているのです。現世で辛い目にあって死ねば。彼らは来世ではより良き者として迎えられ、良い人生が、楽しい人生が待っていると信じられているのです」

「何を考えている……？」

グロッタは、とても嫌な顔をする。

エサルはとても楽しそうだった。

「それが、彼らの“宗教”であり“信仰”なのです。我々、ナベリウスの聖典には、そんなものは無い。魂は無散し、血統のみを歴史の導として、後の世に残していく、っていう思想なのです。でも、彼らの宗教は違う」

まだ少年のあどけなさを残している男は、淡々とそう述べていた。

「僕は考えに考えました。移民どもを、ナベリウス国民として“転生”させるのはどうでしょうか？
つまり、生まれ変わりですよ。彼らが、そう信じれば、それは彼らの現実になる。何故なら、それが彼らの宗教なのだから。僕はそれでも構いません。ねえ、良いアイデアでしょう？ これで、主要移民の一つが、救済されるのですよ。リンゾ・トングと、ポンズルも、彼らの宗教、彼らの救済にそった措置を取ろうと思っているんです」

グロッタは頭を抱え、髪を掻き耨り、思わず、後ずさりしていた。

「ナーエも相当だったが……、お前はもっと、ずっとイカれているよ……」

「貴方の欲求はなんですか？ その為に此処に来たのでしょうか？」

グロッタは必死だった。

「絶滅収容施設を破壊しろ。移民を解放しろ」

血の剣士は、それだけ言った。

エサルは、対峙する相手が、何を言っているのか分からない、といった顔をしていた。

「もう、僕は後戻りするつもりは無い。ドラゴンの為に、ナベリウスの為に、彼らには死んで貰う……」

「ナーエは望んでいない！ 彼女の言葉を信じるなら、解放を望んでいる。もう大量処刑を終わらせたい、って言っていた。奴自身が、お前の首を落とす事を考えていたんだよ！」

エサルには、彼の言っている事が理解出来ないみたいだった。

おそらくは、グロッタの虚妄だと判断しているのだろう。

「俺はお前を殺すよ。正々堂々と……、ナーエ、あいつ、何て言っていたと思う？」

「なんでしょう？」

「お前を、暗殺してでも、止める、と……」

エサルは、とてもにこやかな顔をしていた。

「彼女も甘いんですね。身体を失い、霊体化してもなお。執政者としての義務を果たし切れていない。だから、口タンに殺されて、幽霊になる羽目になったんですよ。侵略者は、徹底的に根絶やしにしないと」

「お前は……、もう、何も聞こえないんだな……」

グロッタは、絶望的に、会話が通じないのだと知る。

エサルは指先を掲げた。

ぼうっ、と。

何か青白い光のようなものが、グロッタの腹の辺りで光っていた。彼はすぐに、これが何なのかを理解する。

一瞬の遅れが命取りになっていただろう。

グロッタは、跳躍していた。

壁の本棚にブチあたり、書物がどさり、と、彼の下に落ちていく。

グロッタが立っていた場所は、彼と同じ身長程度の、氷の棺桶が生まれていた。

「障害物が邪魔だな……」

竜の騎士は、鞘から剣を引き抜く。

その剣からは、氷結のエネルギーが迸っていた。

膨大なまでのエネルギーだ。

マトモに受ければ、凍傷だけで、酷い傷を負うだろう。

グロッタは扉を開いて外に出る。

途中、年老いた執事とすれ違う。

氷の枢を作り出す力、おそらくあれは、多分、人一人分の全身を標的にしないと使えない力だ

。

「すまない、悪いが」

彼は執事を掴むと、盾と人質になって貰う事にした。

執事の事を何とも思わずに。

エサルは、指先を動かしていた。

グロッタは執事を抱えると、バルコニーから飛び降りる。

自分達が立っていた、上の階には、執事ごと氷漬けにしようとして、一回り大きな氷の棺桶が生まれていた。

グロッタは、屋敷の執事を離す。

やはり、……自分の部下を何とも思っていない。

「僕の『アイス・コフィン』の弱点をすぐに見抜いたみたいですが。僕の出来る事はそれだけじゃ無いですからね」

抑揚の無い声が、屋敷の中に響いていく。

室内なのに。

異様な程に寒い。

いつの間にか、先程の、執事が凍死していた。

グロッタは気付いていた。

窓が凍り付いている。

触れれば、皮が剥がれて、血の手形が付きそうだ。

屋敷全体が、巨大な氷の枢なのだ。

一階の扉も、氷漬けにされている。

「僕から逃げても無駄ですよ」

どんどん、温度が下がっていつている。

全身が寒い。肌の剥き出しの部分に、霜焼けが出来始めている。

エサルは、自分をこのまま、使用人達もろとも始末するつもりでいる……。

能力を解除させる為に、この場で、エサルを、殺害するしかない……。

……一度、外に出た方がいいな。

とにかく、此処にいればいる時間だけ、マズイ……。

寒い、動きが鈍っている。

氷の風が渦巻いていた。

このままだと、自分の処刑は完成されるだろう。

何とかして、反撃するしかない。

「『ブラッディ・ボルテックス』」

彼は、血の渦によって、どうにか雪を吹き飛ばして、視界を保とうとする。そして、窓に孔を開けて、一度、外に逃げる事にした。

全力のブラッディ・ランスを、窓に叩き付ける。

少しだけ、氷にヒビが生えたが……。

「駄目だ……。血が凍ってきている……。瞼も、開けられない……」

血の槍は、硬い氷のつららへと変わっていた。

……どうすれば勝てる？

彼は調理場へと向かった。

そこには、すでに凍死した使用人達で埋まっていた。

暖炉も完全に凍り付いてしまっている。火を付けられる気配が無い。

こうしている間にも、寒さで体力が奪われていく。

やはり、エサルを直接、殺して力を解除させるしかない……。

十

「考えましたね」

エサルは、少し皮肉っぽく言った。

「人間の死体で暖を取るなんて、貴方も良いセンスをしています」

未だ体温が残っている、凍死した使用人達を細切れに刻んで、その血と肌で、グロッタは、自らの凍傷を防いでいた。そして、人の肉片を窓に押し当てて、氷を溶かした。

窓の一枚は割れて、外の冷風が部屋の中に入り込んできていた。

「逃げますか？」

「俺には、まだお前が知らない能力がある……」

「何故、今まで、使わなかったのですか？」

「それはな……」

グロッタは、窓に手を掛ける。

「俺一人の血じゃ、使えないからだっ！」

細切れにされた使用人達の血が、一点へと集まっていく。

グロッタの背中に、翼が生えていく。

グロッタは、窓から外に出た。

エサルは、窓の外を見る。

見ると、大量の血が固まって、翼のある真っ赤なドラゴンが生まれ、そのドラゴンの上に、グロッタが乗っていた。

彼はそのまま、エサルから距離を離すつもりでいた。

「逃がしませんよっ！」

エサルの指先が蒼白く光る。

飛行中の、グロッタの周辺に、小さな点が生まれていく。

空中に、盛大に、氷の棺桶が作られていく。

血の竜の片翼に線が命中する。

グロッタは、即座にその片翼を切り離す。

見る見るうちに、切り離した、片翼は氷の柩によって覆われていく。そのまま、ドラゴンは墜落していく。グロッタは、焦りながら、切り離した片翼を生やそうと、自らの腕を剣で刻んでいく。

十

氷の大地だった。

草木も全て、凍り付いていた。

グロッタは蒼褪めた顔をしていた。

エサルは、笑っていた。

「此処で、貴方を始末します」

「やってみろよ」

グロッタは、血竜に乗りながら、低空飛行していた。

二人は、互いの攻撃を繰り返す。

グロッタは、剣の切っ先を向けて、血の槍を放っていた。

エサルは、氷の光線を放っていた。

グロッタの剣に、氷の光線が当たる。グロッタは、剣を手放す。見る見るうちに、剣は氷漬けになっていく。グロッタの攻撃を、エサルは軽い足取りで避ける。

「ふふっ、多分、その剣無しでも、ブラッディ・ランスとかいうのは撃てるのでしょうか。僕の推測ですが……、少し、威力が落ちるんでしょう？」

「……………そうだな。確かに、威力は落ちるな。何か得物があった方が、威力を出しやすい……………」

「僕が圧倒的に有利ですね。じゃあ、もう一度、撃ち合いをしましょうか」

「その必要は無い。もう、お前は終わっているんだからな」

それを聞いて、エサルは、よく分からない、といった顔をしていた。

そして、彼は気付く。

自分の足元の辺りに、血の槍の攻撃はあたっていたのだ。この一帯は……………。

地面がひび割れていく。

「この場所は……………っ！」

エサルは跳躍しようとする。

グロッタは、指先から、血の弾丸を飛ばしていく。それぞれ、エサルの両腕と喉の辺りに命中する。いずれも、致命傷には程遠いものだった。エサルは、間に合わなかった。

氷の大地が割れて、エサルが地面に沈んでいく。冷水が、竜の騎士を飲み込んでいく。

「ああ、この畜生っ！ 奴隷の血を引く分際でっ！」

「終わりだよ、お前は……」

グロッタは、氷漬けの剣を拾い、再び、ブラッディ・ランスを放つ。

それは、今度こそ、エサルの喉を貫通させていた。

彼の死体は、零度の水の中に物体として浮かんでいた。

グロッタの剣は、次第に氷が溶けていく。彼は、自分も薄氷を割って同じように浮かばないように、血のドラゴンに乗りながら、この場所を過ぎ去っていった……。

3

エサルを倒してから、五日程、経った頃だった。

あの後、宮廷にある自分の部屋に戻った後、疲れていたのか、丸一日は寝ていた。

そして、グロッタは、その場所へと向かう事になった。

それは、彼自身の判断での事だった。

高い塀が築かれている。

絶滅収容所の門の前では、沢山のナベリウス兵士達の死体が転がっていた。彼らは、全身に赤い腫れ物が生まれて、異臭を放ちながら死んでいた。

一人のボロ布を纏った者が、グロッタに近付いてくる。

「君に接触したかったんだ」

一人の青年が、彼の前に現れた。

「僕は北東の地獄から生還してきたんだ。みなペスト菌で死んでいったよ。これからも、増えるだろう」

声音は、何処か愉悦さえ孕んでいた。

「僕の名前はカルナックス。君はグロッタだね」

「お前は、……何だ？」

「ヘルズ・バーレーの民だよ。僕はペスト菌自体を、この身に纏う事が出来たんだ。ナベリウスが持っているワクチンじゃ、きっと治癒しないだろう。あるいは、治癒する頃には、間に合わない。僕が接触感染して回るつもりだから」

「止めろ」

グロッタは、彼を睨み付ける。

「これは、僕達と、ナベリウスの戦争なんだ。リンゾ・ドンクにも、僕の支持者はいる。これからはね、僕は収容施設を開放して回るよ。ナベリウス兵達を感染させながらね」

「止めろ、って言っている」

グロッタは、断固とした口調で言った。

「何で分からないのかなあ？ 君は墓守なんだろう？ 強い差別を受けてきた筈だ。苦々しい思いも……。そうか、収容施設を体験していないんだね。絶滅施設の過酷さなんて、想像も及んで

いないんだろうね」

「三回目だ。止めろ、って言っている。それ以上、話し合うつもりは無い」

カルナックスは、なおも話し続けていた。

「悪い血を終わらせて、来世の日を始めさせるんだよ。僕は根強く、我々の民族の宗教を信じている。清く正しい魂として、ナベリウスの人々は生まれ変わるだろう。その為の手助けをしているだけだよ。僕達はとても慈悲深い。それ故に、正しい」

カルナックスは、倒れている兵士の一人をつかむ。

どうやら、未だ生きていたみたいだった。

兵士の顔は更に赤い湿疹などで埋もれ、崩れていく。

眼の前の男は、力を手に入れたのだろう。

ドラゴンから借りた力ではなく、グロッタと同じような、自分自身で発現させた力だ……。

「なあ、僕達の仲間になれよ。共にナベリウスに復讐しよう」

「……………、その考えを捨てないのならば、俺はお前を赦さない」

「残念だよ」

気付けば、カルナックスは、グロッタの左腕をつかんでいた。グロッタの左腕に、赤い湿疹が生まれてくる。

「俺の肺ペストは強力だよ？ この国のワクチンでは直せない。俺はこの国の者達を殺すつもりでいる、可能な限り、殲滅させる。なあ、今、毒矢を作っているんだ。感染させる為に、おそらく、猛威を振るうだろう。でも大丈夫。俺の能力は『ナベリウス民族』だけに、感染するように発現したんだ。……もともと、俺が直接触れれば別だけど……」

グロッタは、カルナックスの腹を蹴り飛ばす。

陰気な顔の青年は笑っていた。

「なあ、俺はどうなる？」

「一日か、二日後に、死ぬよ。でも大丈夫、君も清き魂に転生出来るから……」

「そうかよ」

グロッタは。

有無を言わず、剣を引き抜くと、カルナックスの首をはね落としていた。おそらく、この青年は、今、自身が死んだ事も、分からないだろう。

ごろり、と、無情に二つになった死体は崩れ落ちていく。

……………。

ヘルズ・バーレーの復讐者の代表は、これで殺した事になるのだろう……。

グロッタは自らの感染した左腕を、刀剣で傷付けていく。

彼は自身の体内の血を自在にコントロール出来るようになっていた。感染している箇所を排除するべく、瀉血により、自己治療するつもりでいた。

「グロッタ。お前は外の世界に行け。私は死後、異世界に向かった。お前が知らない文明を見てこい。貧しい場所、富んでいる場所、色々な文明の様式が分かる筈だ」

彼女は、彼よりも、多くの事を知っている。

けれども、それを余り語りたがらない。

それもきっと、分かたれた溝なのだろう。

「ナーエ……、お前はこれから、どうするんだ？」

「隣国の軍事産業の拡大化を潰す。移民、異教徒どもの訪れは、それが根幹にあるからだ。私はこの国に暴政を敷く。……隣国の武器商人どもの首を刎ねてやる。……全面戦争になるかもしれない。……だが、スキタリスさまは、お前の知らない武器である、銃器や爆弾に抗う力を有している」

「そうか……………」

彼女は、少しだけ、ほんの少しだけ、寂しそうな顔をする。

「もし、この国が、以前のように平和に戻れば。私は空に行き、消えるよ」

ナーエはそう告げた。

彼女は、ロタンに殺されて、幽霊の騎士となって実体化して動いている。時折、それを忘れそうになるが、紛れもなく、彼女は死人なのだ。

「お前にプレゼントがある。よくやってくれた……」

ナーエは二つの箱を置いた。

グロッタは、中を開ける。そして、喜んだ。

それは、彼が欲しかったものの一つだから……。

エサルの死と共に、移民虐殺の最高権力者はいなくなった。

ナーエは、移民の追放を望んでいる。

この国が良くなるかどうかは、分からない。

グロッタは、この国を出ようと決意していた。

ナーエも、その手助けはしてくれると言う。かつて、彼女に恋慕し、物心付いて無い頃に、結婚の約束を交わした。……最後に、ナーエだけは、彼の味方になった……。これからも、友人として、別の国でなら、会っても良いらしい。

あらゆる者達と、共存しようとして、あらゆる者達から憎まれた……。

自分はそうなる命運だったのだろう。

ナーエは、今後も、血が多く流れる、と告げた。

それはきっと、絶望的な程に……。

「畜生……、何故、人間は分かり合えないんだ……………」

しばらくすると。

これから、船に乗る事になる。

新天地だ。

墓守として、ナベリウスに留まる事は無い。

多分、自分は少しだけ自由になれたような気がする……。

心のどこかに、二度に渡って、この国を荒廃させたロタンと自分自身を重ねる。何となく、直観で分かった。ロタンも、自身の力に振り回されていたのだろう。たまたま、狙ったのがこのナベリウスであっただけで……。

人間は何が罪なのだろうか。

分からない……。

もうじき、船は来る。

彼は、あらゆる者達からの、憎しみを買いながら、この世界の外に出る事になる。

ポンズルの者達に挨拶しようと思ったが止めた。

やはり、彼らの文化を受け入れる事は最後まで、出来なかった……。

自分はあらゆる者達から、愛されようとして、結果として、殆どのものを失ってしまったんじゃないのだろうか？ 答えが出ない。どうすれば良いのか分からない。どうすれば、良い結果になったのか分からない。自分は、ナベリウスの騎士を殺し、墓守の仲間達を殺し、ヘルズの復讐者を殺し、リンゾ・トングの娼婦を殺害し、ポンズルの者達の文化を心の中では強く軽蔑している。

五つの大きな民族達への、罪を全て背負った事になる……。

移民の大部分は、強制排除され、元の国追い返されるか、別の国に渡航する事になった。そして、ナーエの命令によって、それが行われる前は、数え切れない者達が虐殺されていった。

「俺は人間が大嫌いだよ……」

そう言う、自らの血にも、人の血が流れている……。

……自分は墓守……、民族に対する帰属意識なんて無かった。今でも、決定的に、ナーエの事が理解が出来ない。自分は他人から愛されたい、認められたい、というエゴだけで生きている。きっと、それが自分の核の部分で、それ以上でも、それ以下でも無いのだろう。

海が、そんな自分の内面の醜悪さを溶かす程に、美しい……。

彼はかつての親友である、ジュタルとゼールシュの二人分の頭蓋骨を大切に握り締めていた。

ナーエに協力して貰って、死刑囚の墓から出して貰った。

……ジュタル、ゼールシュ、お前達は何人、殺したんだ？

この国に、罪の無い者などいるのだろうか？

みな、心に闇色の獣を抱えている。

……好きなように、俺を恨めよ。俺はお前達が、永遠に存在してくれる、っていう事実、救われるんだ……。

親友達に、旅の先を見せたいと思った。今も、隣で笑っていた。そう言えば、ロタンの襲撃以来、この国は、幽霊がよく出るのだ。

死神も、後ろで微笑んでいた。

血色の鎌を、握り締め、それはグロッタの首筋に当たっていた。

大海原は、とても綺麗だった。

空の蒼も、この世のものとは思えない程に、美しい。

彼は美しいものを見ながら、微笑んでいた。

.....俺は何を得て、何を失ったんだろう.....？

港町を見る。

自らが殺した同胞達の影が揺らめきながら、此方を眺めていた。

グロッタは眼を閉じる。

ロタンはもう、この地にいない。

再び、眼を開く。.....港町にも、隣にも、影は存在していなかった.....。

E N D